

ア
ー
ト
ライ
ター
大
賞

第6回
高校生

*Art Writer Award
for High School Students*

優秀作品集



第6回高校生アトライター大賞
優秀作品集

第6回高校生アートライター大賞

高校生アートライター大賞とは
アートについて自分の言葉で考え、伝える力を育む、高校生のためのエッセイのコンテストです。
2005年から一年おきに、筑波大学で開催しています。

課題 アートとあなたとのかかわりを、2000字のエッセイにして送ってください。

募集部門

- ◎ 制作体験 自分が作品をつくった体験をもとに書く
- ◎ 作品探究 アーティストがつくった作品について書く
- ◎ 芸術支援 アートと人々の交流について書く

応募できる人 高等学校ならびにそれに相当する公的教育機関に在籍する生徒。

賞〈賞状ならびに記念品〉 大賞3編 / 優秀賞 / 入選 / 学校賞

応募締切 2015年10月14日(水) 結果発表 2016年2月、ウェブ上にて

選考委員 特別選考委員(五十音順)
内田 伸子 お茶の水大学名誉教授(発達心理学)
熊倉 純子 東京藝術大学教授(芸術環境創造)
東良 雅人 国立教育政策研究所教育課程調査官(美術教育)

学内選考委員

守屋 正彦(芸術学) 中村 伸夫(美術) 國安 孝昌(構成) 山中 敏正(デザイン) 稲葉 信子(世界遺産)
岡崎 昭夫(芸術支援) 齊藤 泰嘉(芸術支援) 直江 俊雄(芸術支援)

学生選考委員 筑波大学生

条件

2000字以内で、個人が日本語で執筆したもの。図や参考文献一覧等は文字数に含まれません。文章の題名を各自でつけてください。
小論文のように論題を設定して論理的に考察しても、体験報告や随想のように個人的な思いを中心に語っても、雑誌や新聞記事のように伝えることを主眼にしたものでも構いません。

「アート」の範囲は、美術やデザインを中心とした視覚芸術を想定していますが、執筆者が自由に判断してください。学校の美術教科書にも、多様な美術の例が示されていますから、参考にしてください。

応募方法

下記ウェブサイトの情報にしたがって原稿を作成し、インターネットから送信してください。
(学校でまとめて応募する場合は、CD-R等のディスクで提出しても受け付けます。下記住所あて、当日消印有効。)

詳しい応募方法やこれまでの入賞作品等は、ウェブでご覧ください。

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~awa/>

お問い合わせ

〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学芸術専門学群 高校生アートライター大賞係 [芸術支援研究室：直江]
TEL 029-853-2821 awa@geijutsu.tsukuba.ac.jp

個人情報の取り扱い等

ご提出いただきました個人情報は、本コンテストに関する用途のみに使用します。応募原稿の著作権は、筑波大学芸術専門学群に帰属します。応募原稿を出版物やインターネット等で公開することがあります。

主催 筑波大学芸術専門学群

共催 毎日新聞社 後援 文部科学省 全国高等学校美術工芸教育研究会

協賛 株式会社ベネッセコーポレーション

協力 COPIC ターナー色彩株式会社 ツールズ筑波大学売店 フィルムアート社 リキテックス

企画 筑波大学芸術支援研究室

第6回高校生アートライター大賞 選考結果

2016年2月 筑波大学芸術専門学群 高校生アートライター大賞選考委員会

応募総数823編

都道府県	学校名	氏名	学年	題名
------	-----	----	----	----

大賞 (3編、五十音順)

岡山県	明誠学院高等学校	高木 優	2年	米芾が微笑むとき
東京都	東京都立工芸高等学校	中村 陽道	2年	流れる、という思い
静岡県	浜松学芸高等学校	松尾 華子	2年	地中からの美

優秀賞 (17編、五十音順)

愛知県	愛知県立岩倉総合高等学校	伊木 さなえ	3年	〈存在〉するアート
京都府	京都市立銅駝美術工芸高等学校	大里 真瑛子	3年	色を創造する
北海道	北海道おといねっぶ美術工芸高等学校	大田原 知美	2年	女神のアクセサリー
神奈川県	神奈川県立弥栄高等学校	岡西 夏季	3年	「光」のはなし
佐賀県	佐賀県立佐賀北高等学校	久保 美萌理	3年	アートが繋げるもの
北海道	北海道おといねっぶ美術工芸高等学校	小林 大樹	3年	ものづくりは人を幸せにする
京都府	京都市立銅駝美術工芸高等学校	清水 里織	2年	芸術の力
岐阜県	岐阜県立岐阜高等学校	白鞘 南海	1年	プラスデザイン
東京都	学習院女子高等科	杉浦 沙季子	3年	Shellphone——命の想いを繋ぐ——
東京都	芝高等学校	鈴木 大樹	2年	“僕”を描く ～『自画像、光と影』 ヘレン・シャルフベック～
熊本県	熊本県立御船高等学校	高永 悠乃	2年	自分と向き合う
京都府	京都市立銅駝美術工芸高等学校	西尾 綾香	2年	美術と日常
東京都	東京都立総合芸術高等学校	福田 百花	2年	命とアート
大阪府	大阪府立港南造形高等学校	福山 葵	3年	金属とは
北海道	北海道おといねっぶ美術工芸高等学校	宮川 こころ	2年	はだかの心で世界をみる
岐阜県	岐阜県立岐阜高等学校	山中 真名	1年	粘土のクツを創る
熊本県	熊本県立第二高等学校	渡邊 菜	2年	音のない世界に絵を

入選 (30編、五十音順)

群馬県	共愛学園高等学校	石井 かめりや	2年	スズランテープに教わる
岐阜県	岐阜県立岐阜高等学校	石濱 里佳	1年	クレーの線
静岡県	加藤学園暁秀高等学校	太田 明理紗	2年	「檸檬」は色彩と言葉のアート
岐阜県	岐阜県立岐阜高等学校	小澤 諒一	1年	水泳界の美
東京都	東京都立工芸高等学校	小野坂 葉子	2年	素晴らしきシンメトリー
静岡県	浜松学芸高等学校	片岡 月	2年	美しさの可能性
静岡県	浜松学芸高等学校	片桐 旭日	2年	時代の象徴
熊本県	熊本県立第二高等学校	河内 千嘉	2年	アクアリウム越しに見た
東京都	東京都立工芸高等学校	菊池 菜々子	2年	「唐揚げ」と「アート」
北海道	北海道おといねっぶ美術工芸高等学校	楠 朋	3年	童心
熊本県	熊本県立第二高等学校	嶋田 凧紗	2年	視野を広げた三分半
大阪府	大阪府立港南造形高等学校	島田 鈴	3年	演じる礼儀、観る礼儀
埼玉県	埼玉県立大宮光陵高等学校	末次 楓	1年	鉛筆と過ごした半年間
北海道	立命館慶祥中学校高等学校	菅澤 由佳子	2年	保存手段としての絵画

沖縄県	沖縄尚学高等学校	鈴木 かれん	2年	命を吹き込む、もう一度
東京都	東京都立工芸高等学校	晴城 友里加	2年	感覚情報、さまざまな感覚。
東京都	東京朝鮮中高級学校	チャン ミョンヒ	1年	私たちの存在意義とは
北海道	北海道おといねっぶ美術工芸高等学校	冨田 真之介	2年	食という美術鑑賞
北海道	立命館慶祥中学校高等学校	西岡 聖奈	1年	シャガールの魅力
福井県	福井県立鯖江高等学校	久野 鈴奈	3年	何も考えずに作ること
東京都	私立女子美術大学附属高等学校	廣瀬 由子	1年	等伯の松
埼玉県	埼玉県立大宮光陵高等学校	淵田 紗葵	1年	代弁者
長野県	長野県立諏訪清陵高等学校	巻淵 優也	3年	「楽描き」と太古の人々 ～「無」を「有」へ～
福岡県	福岡県立大宰府高等学校	松元 梨紗	2年	腐りかけた林檎
熊本県	熊本県立第二高等学校	丸山 純桜	2年	「あなた」と美術館
熊本県	熊本県立御船高等学校	宮村 海斗	2年	素材と作品
神奈川県	神奈川県立弥栄高等学校	三好 みはる	2年	櫻
東京都	筑波大学附属駒場高等学校	森 有哉	2年	現代アートと美しさ
静岡県	静岡県立清水南高等学校	山田 笑歌	1年	私がキャンバス
熊本県	熊本県立第二高等学校	渡邊 眞珠美	2年	ことば

学校賞（8校、五十音順）

大阪府立港南造形高等学校

岐阜県立岐阜高等学校

京都市立銅駝美術工芸高等学校

熊本県立第二高等学校

熊本県立御船高等学校

東京都立工芸高等学校

浜松学芸高等学校

北海道おといねっぶ美術工芸高等学校

選考経過

2015年4月	第6回高校生アトライター大賞募集開始。
2015年10月14日	受け付け終了。応募総数823編。
2015年11月	第一次選考を行い、約200編を選出。（学生選考委員52名 学内教員）
2015年12月	第二次選考を行い、入選作品50編（優秀賞候補）を選出。（学生選考委員47名 学内教員）
2016年1月	第三次選考を行い、優秀賞作品（大賞候補）20編を選出。（学内教員）
2016年2月	最終選考会議を開催し、大賞3編、優秀賞17編、学校賞8校を決定。（特別選考委員）
2016年3月	筑波大学学生賞を決定。（学生選考委員47名）

選考基準（第一次選考、第二次選考）

- 内容面
1. アートに関する自分らしい見方、取り組み方がよくあらわれている。
 2. 対象とするアート活動について、読者に伝わるようによく説明されている。
 3. 読んだ人の関心呼び起こし、強い印象を与える。
 4. できれば間接的な知識だけより、自分の実体験をもとに述べた方が望ましい。
 5. アートに関する基本的知識に重大な誤りがない。
- 形式面
1. 文章の流れが一貫し、伝えたいことがよくわかる。
 2. 自分の考えと、それを裏付ける具体的な事実の記述との対応がとれている。
 3. 調べた知識や引用と、自分の体験や考えとが明確に区別して書かれている。
 4. 日本語表記に重大な誤りがない。

ただし、形式面より内容面を重視する。

第三次選考では上記の基準によらず、各委員による採点結果を集計し、議論を行ったうえで決定する。

最終選考では上記の基準によらず、特別選考委員の合議により決定する。

アートに対峙し 新たな地平が拓かれる

内田 伸子

発達心理学者・お茶の水女子大学名誉教授



“結局、芸術はみな同じなのだ。言葉で絵を書くこともできる。ちょうど詩で感覚作用を描くことができるように。”

(ピカソ)

アトライター大賞候補の20作品を読み、私は、ピカソのこの言葉を思い出さずにはいられなかった。目のつけどころ、作品との対峙の仕方、作品からわきあがる表象、どの視点から見ても甲乙つけがたく、粒ぞろいである。どれを選ぶか。困り果てた私は、次の3つの視点から、心に訴えかける作品を選ぶことにした。

第一に、切り出し口、目のつけどころに意外性があるか。第二に、作品と真剣に向き合い、作品との対話を通して新たな気づきや発見があったか。第三に、作品との対話の過程が読む者の心にぐっと迫り訴えかけてくる文章か。こうして選んだ作品を最終選考会に持ちより3本絞り込んだ。

『米芾が微笑むとき』；「蜀素帖」を開き「字が生きているみたいに私の目に飛び込んできた。どくんどくんという胸の音が周りにきこえるのではないか」と思うほど。臨書を通してわきあがる米芾への「あこがれ」と「尊敬」と「希望」の正体を見極めようとして、作者は初めは「字としてではなく絵という形でとらえていた」。米芾の文字は魂をもつ「生き物」。作者は米芾の字形にとらわれ、そっくりに書こうとするあまり線が委縮してしまい、米芾特有の線質を見失っていたことに気づいていく。この内省を通して、自分独自の「蜀素帖」を創ればよいとの到達点を見出すまでの内省は緻密で鮮やかである。

『流れる、という思い』；芸術のルーツはどこにあるか？火焰土器に目をつけ、その迫力に芸術のルーツを探る過程が達者な文章で綴られていく。現代アートが、自覚しているかどうかは関係なく、色濃く影響を受けているのではないかという結論にまでたどり着く。読む者を惹きつけ捉えて離さない確かな文章構成力を高く評価した。

『地中からの美』；陽光は、季節や一日の時間帯により変化する。その変化を計算しつつして設計された地中美術館では、時々刻々変化する陽光との競演で、作品は時間帯により彩を変え、生き物のように動き出す。内観を内省し丁寧にことばに表していく。内観をことばにする過程で、「絵画だけを美しいと思っていた私」は空間の美へと目を向けることで視野が広がったことに気づいていく。「地中のコンクリートと光は作品たちの魅力を引き出し、私に「空間の美」を教えてくれたのだ。」という結論は説得的であり秀逸である。

芸術の存在価値と、造形の真髄に触れる

熊倉 純子

東京藝術大学教授（芸術環境創造）



今回、優秀賞に選ばれた20作はいずれも非常にレベルが高く、甲乙つけがたいなかから大賞を選ぶのは難しい作業でした。とにかく、読んでいて「おもしろい！」と膝を打つような作品ばかり。みずみずしい感性に心が洗われたり、洞察力の鋭さに唸らされたり、対象に素直に感動している若い心に共感したり、もう、大変です。

迷った末に選ばれた3作について、どこが「好き！」だったのか、少し感想を述べましょう。

最近、私の専門の現代美術を取り上げてくれる高校生の皆さんが増えていて嬉しい思いがいたしますが、大賞に選ばれた「地中からの美」には驚かされました。まず、「<美しい>という感覚はどこからうまれてくるのだろうか」という問いかけの、なんと根源的なことでしょう！安藤忠雄の建築や、ウォルター・デ・マリアの作品の本質を的確に感じ取った感性の鋭さと、自らの中の「美」の範疇が広がったことへの驚きを素直に認める若さに心打たれました。まさに現代美術の真髄を突いた論考です。

一方、「流れる、という思い」は、現代美術から打って変わって縄文土器への深いまなざしに貫かれた独自の世界観を描いたものです。古代から現代に通じる普遍的なパワーについて論述する文章の展開力は瞠目に値するもので、親鸞の言葉の引用には、東洋的な哲学が感じられます。彼の視座には、19世紀から20世紀を支配した「芸術のための芸術」という西洋的な概念を打破しようとする21世紀の息吹が芽生えているのかもしれませんが。温故知新の鮮やかさ！

もうひとつの大賞作品「米芾が微笑むとき」は、一転して私のまったく知らない書の世界がテーマです。米芾に魅了され、模写を続ける筆者の体当たりの悪戦苦闘ぶりは、昨今の若者にありがちな、マニュアル好きで正解をすぐに欲しがるイメージとは真逆のものです。まさに、真実を自分の力でつかみ取ろうとする純粹な信念に溢れており、ぐいぐいと引き込まれてしまいました。リアリティのある文章から、書道の造形性について、改めて教えられた思いもいたしました。

サブカルチャー全盛の現代に、芸術の存在価値や、造形の真髄についてこれほど深く考え、感じ取ろうとする若い人たちがいること——大賞に輝いた3作はじめ、今回の優秀作品の多くから、未来への大きな期待が膨らむ2016年の新春となりました。



高校生アートライター大賞に寄せて

東良 雅人

国立教育政策研究所 教育課程調査官（美術教育）

この度、第6回高校生アートライター大賞の特別選考委員として大賞、優秀賞、学校賞の選考に関わらせていただきました。冒頭に私自身のことを少しお話しさせていただくと、私は、子供の頃から決して大人から見るところの「上手な絵を描く」子供ではなかったと思いますが、描いたりつくったりすることがとても大好きな子供でした。そしてそんな幼少の頃を経て、大学時代は孔版画を専攻し、作品制作に没頭する日々を送り、卒業後、京都市の公立中学校で中学校美術科の教員、公立小学校で図画工作科専科教員として子供たちの美術や図画工作の指導に携わった後、現在は国の教育行政に関わる仕事をしています。振り返ってみると私の人生は、自身で創造活動に取り組むことから、子供たちの創造活動を支える立場へと変化していきながら、これまで常に「美術（アート）」と関わる日々の中で生きてきました。

そのような自身を振り返りながらの今回の高校生アートライター大賞に応募された作品の選考はとても興味深いものでした。先述した経歴の私にとっての「美術（アート）」とは、これまでの人生そのものであり、それは常に自分の「生きる」ということと「美と創造」との関わりであったように思います。幼い頃は、一般的な概念や知識に左右されることなく自由奔放に形や色と関わる姿が多く見られます。中学生や高校生の心身の急速な発達が見られ、自我意識が強まるとともに人間としての生き方や価値観が形成されていく時期には、形や色との関わりは、単に自己とだけの関係だけでなく、他者や社会と拡がる中でより深く関わるようになるのだと思います。そして大人になるにつれてその関わりは更に一人一人多様に変化していくのでしょうか。

私は、今回の高校生アートライター大賞の選考では、作者がこのような高校生といった時期の感覚や感性を全開し、「美と創造」の世界と如何に関わり、気づき、成長したかということを書かれたものから読み取ろうとしました。それは選考という形をした、私自身の記憶をたどる行為でもありました。

今回の大賞の三作品は、三人の選考委員の視点が大きく重なった作品だと言えるのだと思います。しかし、私にとって選考した全ての作品は、どれもが一人一人の高校生の時期だからこそ感じ取れること、考えられることがつまっているものでした。読み続ける中で、作者の豊かな感性が、私の心を揺さぶり私自身の過去を振り返らせる場面も一度や二度ではありませんでした。

全ての作品を読み終えて、選考を通して私自身の中に生まれたもの、実はそれこそがこの高校生アートライター大賞の本当に意義なのかもしれません。

第6回高校生アトライター大賞の学内選考に加わって

中村 伸夫

芸術専門学群長 筑波大学教授（美術専攻）

今回はじめて学内の選考委員として応募作を読ませていただきました。実に多方面のテーマにわたり、文体もさまざまで、奇抜な着想のものもあり、とにかく高校生諸君の言葉によるアートへの切り込みの鋭さと深さに驚きました。

ものごとを本当に考える力、それは文章を書くという行為によってしか鍛えることができません。もともと、ただ単に考えるということはありません、かならず言葉で考えているはず。言葉の抵抗を受けてそれとケンカを繰り返しながらも、それを巧みに操作して、自分の考えを突き詰めてゆく行為、それが文章を書くということです。

君にとっていちばん幸せな瞬間は、と問われて、自分の複雑な考えを文章で表現できたと思えた瞬間です、と答えたのは、若き日の中国宋代の文人蘇東坡^{そとうぼ}です。彼は書画というアートに関して、題跋^{だいぼつ}というスタイルの優れた論評をたくさん書きのこしています。

アートに関心をもちつづけ、蘇東坡のようにライターとしての幸せな瞬間を何度も味わってもらいたいものです。皆さんのアトライターとしての更なる進展に期待しています。

高校生の愉快的な断定力と純粋な熱意

齊藤 泰嘉

筑波大学教授（芸術学専攻）

今年も全国各地の高校から数多くの応募作品が集まった。これまで毎回、学内選考委員をつとめさせていただいたが、今年は、例年に無く、個性的な作品が多かったように思う。アートに関する軽妙で愉快的な話から、やや深刻な切り口でアートのタブーや異端に触れたものまであって、読み応えがあった。既製の芸術観にとらわれず、これもアートとして考えたいという若い世代の自由な発想を支持したい。印象に残った作品を以下に記す。菊池菜々子さんの「『唐揚げ』と『アート』」。香ばしい匂いの唐揚げがアートでないとは考えられないという菊池さんの愉快的な断定力に脱帽する。福田百花さんの「命とアート」。鉄砲で撃たれて死にゆく鹿を写した写真は表現におけるタブーの問題を突きつける。だが、それよりも、職員室のドアを叩き、先生を説得し、展示にこぎつけた福田さんの純粋な熱意が素晴らしい、また、それよりも福田さんの話に長時間耳を傾けて、自分の思いや説明を写真に添えれば展示をして良いと許した先生の優しい気持ちに頭が下がる。これからも、アートに関する高校生たちの愉快的な断定力、そして職員室のドアを叩く純粋な熱意に期待したい。

ドキュメントとフィクション

岡崎 昭夫

筑波大学教授（芸術学専攻）

今回は800点以上の応募の中から残った最終選考の50点を読む機会を得ました。今回はドキュメント性のある文章が多くあり、その観点から考察された論文は読後感を強めていました。制作体験に関する論文は自らの体験に裏打ちされて読み応えがあるものが多く、作品探求では見たことを追制作することで実証しようという試みに驚きました。また芸術支援では生命や身体に関して芸術を通して深く熟考しようとする真摯な態度に心を打たれました。ドキュメントの傾向が強まるとアートのフィクション性への想像力が弱まる恐れがありますので、この両者のバランスをいかに取るかがアートライティングのキーポイントだと感じました。

現代の美術の応援団に

國安 孝昌

筑波大学教授（構成専攻）

優秀賞受賞おめでとうございます。どの応募文も甲乙つけがたく力作ぞろいというのが第一の感想です。この感想に嘘はありません。

ただ、今回、初めて高校生アートライター大賞の応募文を拝読して期待が大きかったからかもしれませんが、アンビバレンツな気持ちを私は持たざるをえませんでした。

どの応募文もそれぞれテーマの視点も新鮮で文章の構成も上手く、その主張には何の文句もありませんでした。でも読み進むうち、「ああ、この子たちの中から、一線の作家は出ないだろうな」と感じてしまいました。

どうして、そんな気持ちになったのか、ずっと作家活動をしてきた私自身の自負と、時折、展覧会で一緒になるトップアーティスト達と話をしてみると、此処にある文章の誰より、もっと切実でその人が抱えざるを得なかった「とても歪な課題」を抱えていて、その苦しみを苦しむ真摯な態度で制作にあったっていることを強烈に感じるからなのです。

すべての応募文を拝読して、その主張は万人の共感を呼ぶものばかりで私には物足りません。もっと歪でもいいから本当のことを正直に述べて欲しかったと感じたのです。

芸術は、知れば知るほど深く、勉強すればするほど底なし沼の魅力を持つ世界です。けれど、芸術は人の生活の必需品ではないのです。美術なんてなくても人の生活は成り立ちます。美術に関わる私達は社会的には必要とされる人ではないのも現実です。しかし、そうした無駄が「無用の用」として、何より多くの人々にあって個々の人生を本当に豊かにしてくれることも、確かな真実なのです。

皆さんが、どういう生き方をしても、是非、現代の美術の応援団になって欲しいと私は願います。応援団が一人増えるごとに日本の文化は豊かに深くなるのですから。

高校生アートライター大賞に寄せて

山中 敏正

芸術系長 筑波大学教授（デザイン専攻）

高校生アートライター大賞も6回を数え、すでに第1回の応募者は大学でいえば博士課程を修了しようかというところである。振り返ってみれば、高校時代とは日々学び、体験し、それを「自分のものにする」ために悪戦苦闘していた時期であった。そして高校生として向き合っていたアートは自分と周囲の間の様々な違いとそれを自分がどのように捉えたいかということの間接的な表現であったように思う。この取り組みは、そのアートを、時には客観的に、時には主観的に捉え直し、文章で表現する行為が新しいアートへのアプローチであるということを示したという点で、画期的だったのではないかと思う。もし〇十年前にこの企画があったとして、自分が応募したかどうかは定かでは無い。しかし、この企画に挑戦し、自らの創作活動を問い直すという経験をした者たちは、一つの新しい見方に気づいたということであり、すべての応募者、あるいは応募しようと思った高校生たちの地平線を拓くために貢献したのではないかと思う。

高校生アートライター大賞の改革

直江 俊雄

筑波大学教授（芸術学専攻）

第一回開催時から実務運営を担当していますので、今回は少し裏方のことを書きます。高校生アートライター大賞は、開催費用を確保するために、予算要求したり企画書を書いたりすることから始まります。今回は、学外の企業のご協力を得ることができ、開催にこぎつけました。学内予算としては「アートライティング教育によるグローバル・アートコミュニケーション人材の育成」という企画が「革新的な教育プロジェクト支援事業」に採択され、高校生アートライター大賞に学生選考委員として参加する本学学生の能力開発のため、フィルムアート社取締役津田広志氏とブリティッシュコロンビア大学（カナダ）リタ・アーウィン教授の特別授業を開くことができました。これまで主に芸術の学生が選考委員を務めていましたが、今回は全学群・学類に参加を呼びかけ、延べ約100名の学生によって第一次・第二次選考を進めるという、かつてない取り組みを行いました。本稿を執筆している現在、学生だけで選ぶ「筑波大学学生賞」の選考が行われており、その結果を表彰式で発表する予定です。

応募数の増加に対応するため、前回まで受け付けていた紙の原稿による応募を取りやめ、オンラインでの応募に一本化したことは、応募する皆さんのハードルを上げてしまったかもしれませんが、ご理解をいただければと思います。また、前回の選考委員メッセージで、応募数に対して受賞者の数が少なすぎることを指摘しましたが、今回30編の「入選」枠を設けて対象を広げました。皆さんの取り組みを少しでも称えることができればと思っています。

夏にフィルムアート社との共催で開いた「高校生アートライター大賞シンポジウム なぜ、今アートを書く時代なのか」には、大学生になった前回の受賞者が参加してくれました。このコンテストに参加した皆さんが、それぞれの進路で芸術との関わりを育て続けてくれたら、これ以上の喜びはありません。惜しくも表彰されなかった皆さんを含めて、応募して下さったすべての方々に感謝したいと思います。

米芾は嫌いだ。書いても書いてもかなわない。「悔しい。負けるもんか、今度こそは」と思って書き上げても、比べてみると「どうだ俺は凄いだろう」と上から私を見下ろしてあざ笑うのだ。

私は、高校の書道部に所属している。一年生の時、手に取った本に載っていた米芾の書いた「蜀素帖」にくぎ付けになった。早く次がみたいとページをめくった。まるで字が生きているみたいに私の目に飛び込んできた。どくんどくんという胸の音が周りにきこえるのではないかと思った。こんな字を書ける人がいたんだ。凄い。憧れと尊敬、そして「私も書きたい」とわくわくし、希望でいっぱいになった。

米芾は、「宋の四大家」と称される中国の高名な書道家だ。

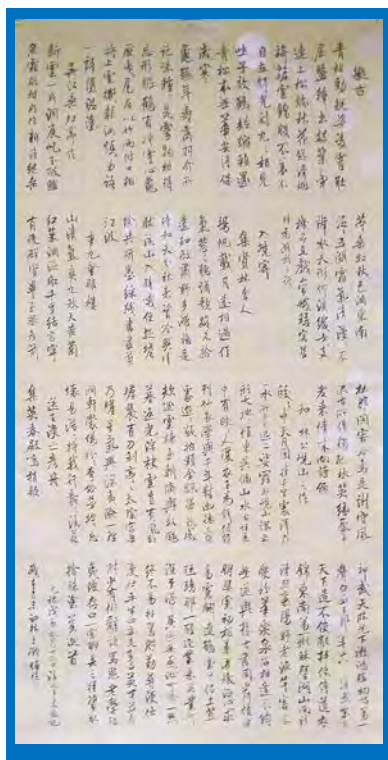
古典をまねて書くことを臨書というが、米芾の書を見てから、ほぼ毎日「蜀素帖」を書く生活が続いている。疲れて眠いときは1行だけのこともあるが、全臨をすると約12時間書き続けることもある。書いた作品は半紙、半切、全紙あわせて200を超えている。

当初は、形をまねることに一生懸命だった。書くことがうれしくてたまらなかつた。コピーのように書けるつもりになっていたが、顧問の先生から、「きれいなだけで気持ちが伝わってこない」と言われた。臨書はどれだけ似ているかが問われるのではないか。私には何がたりないのか。形は、似ているのに、なぜ。

私は、小学校から習字を習っていて全国展でもトップの賞を何度もとっていた。しかし、高校になって「蜀素帖」を書道展へ出品してもなかなか賞に入らない。焦りと、不安。私のちっぽけなプライドは、こなごなになった。迷いながら、書くことが苦痛をとまうようになってきた。

今まで書いてきた臨書作品をもう一度みかえした。どれも同じように見える。私は、何を考えて作品を書いたのか。私は、米芾という人物についてほとんどなにも知らなかったことに気づいた。そこで米芾に関する書籍を読みあさった。

米芾は、若い頃、様々な人の臨書を繰り返した。そしてその鑑識力は人並



高木 優 「臨 蜀素帖」 2015年

み外れていた。あまりに臨書が優れていたため米芾の臨書が本物に間違えられたとのエピソードも残っている。調べれば調べるほどその偉大さがわかり、私には、難しすぎるから別のものを臨書した方がいいのかも思った。でもあきらめたくない。私は、自分の作品を見直しているうちに米芾の「蜀素帖」を字ではなく絵というか形でとらえて書こうとしていたことに気づいた。意味も分からず、うわべだけを見てわかったつもりになっていた自分を恥じた。

私に足りなかったものは、なんなのか。米芾の特徴である線の勢いが欠けていたのではないか。形にとらわれ、そっくりに書こうとするあまり線が萎縮してしまい伸びやかさや弾むような感じがでていなかったのだ。私が最初に「蜀素帖」を見て感動した「字が生きている」感じは線質の素晴らしさだったのではないか。

そもそも「蜀素帖」は、高価な絹の布に書かれた米芾自作の詩なのだ。湖州を訪れた際に知事に頼まれて書いたといわれている。米芾は、どんな気持ちで書いたのだろうか。詩とは自らの感情の高ぶりを文字にして表現する作品

だ。私もその感情の高ぶりを体感してみたいと思った。

私は、絹ではないが、高校生には高価な、金と銀がちりばめられた一枚2800円の紙を買ってきて米芾の気持ちを想像しながら臨書した。

最初は、とても緊張してすごく丁寧に筆を入れていった。手に汗がにじんだ。一文字一文字集中した。しかし、途中からは、どんな仕上がりになるか楽しみでしかたなくなかった。気持ちが前に行く感じで筆が進む。そんな感覚で米芾も書いたのだろうか。私は、「蜀素帖」についてずっと不思議に思っていたことがあった。冒頭は、きちっとした線で字の大きさがそろって書かれていたのに、途中から字が小さくなって大きさもまばらで横に傾いたりしているのだ。私は、最初は集中していたが途中から集中力が途切れたのだろうと勝手に考えていた。しかし、そここそ米芾のさまざまな技法がくみこまれていた。筆がどンドンすすむ中で自分のテクニックを見せつけようという野心。みんなを驚かせようとする米芾の人間性があふれているのではないかとも思えた。

この作品を書き終えて、米芾を意識してうまく書こうと萎縮する必要はないんだと感じた。私は、私。自分の「蜀素帖」を作ればいいんだ。気持ちが楽になってきた。臨書を始めてまだ一年半。今の私に書ける最大限のことをすればいいんだと気付いた。

形ではなく、米芾の一番の特徴は、線質だ。それを出せるようになるためには毎日の練習が必要だ。焦る必要はないと思えるようになってきた。

負けばかりで悔しいけれど私は、敬愛する米芾に今日も挑み続ける。何十年か先、米芾が、微笑むことを夢見て。

参考資料

墨第81号 米芾中国北宋の巨腕 芸術新聞社 1989年11月12月号 (p6~80)
墨第229号 米芾の書技を学ぼう 芸術新聞社 2014年7月8月号 (p6~81)
書学大系 碑法帖篇 第三十五卷 米芾 同朋舎出版 1984年 (p91~127)

大賞

流れる、という思い

中村 陽道 東京都立工芸高等学校 2年

起源を常々知りたいと思っている。それは現代では「アート」とか「美術」という呼ばれるものの事についてである。今でこそアートは文化的な活動の一つとして社会の中で広く認められているものではあるが、我々はいかにしてそうした表現活動を開始したのだろうか。言ってみれば狩猟採集を生活の全てとし、今よりずっと“動物的”であった古代の人類にしてみればそうした活動は何の糧にもならないし、無意味な活動であったはずである。現に自主的に絵を描き、石を彫り彫像を作り始める動物を人間以外に僕は知らない。我々はなぜ表現を始めたのか、そして続けるのか。これは果てもはっきりした答えもない問いであるが、しかし僕は常々この問いのどこかに応えたいと思っている。

ARTS OF JOMONという展覧会が2015年はじめに表参道のスパイラル・ガーデンで開かれた。縄文土器にインスパイアされた現代のアーティスト、クリエイターたちがそれぞれの方法で縄文土器をテーマとした作品を展示する、というものだ。大きな展覧会ではなかったが僕はいたく感動を覚えた。縄文土器は歴史の教科書で誰もがその姿を見た事があるはずだ。「北海道から沖縄諸島を含む、現在でいう日本列島各地で縄文時代に作られた土器」（フリー百科事典ウィキペディア日本語版）のことを言う。この縄文土器に多く見られる特徴としてユニークなのが、土器の表面に渦巻や、トゲのような装飾など様々な文様が用いられているという点である。中には実用性を超えて異様とも言えるほどの巧妙な造形を見せたものもある。馬高遺跡出土の《深鉢 火焰型土器》(図1)などがそのいい例だ。僕はこれが前述した“起源”のヒントになり得るものとして以前より気になっており、この展覧会に足を運んだ。

僕はその展覧会で猪風来というアーティストの作品に出会った。彼は縄文アーティストを名乗り、現代の縄文土器とも言えるような作品を制作している。彼の作品を目の前にして感じたのは“流れ”の存在だった。それは火焰土器を初めて見たときの感覚にも似ていたようにも思う。硬質なはずの彫刻作品のはずだが、そこには確かに“流れ”が存在しているのだ。一体何の流れだろうか、水かもしれないし炎かもしれない。或いは脈動のようにも思えた。感じられたのは巨大なうねりという名の流動であり、なによりそこには命があった。

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

図1 《火焰土器》

これは具体的な対象や感情があつて、それを表現しているのではない、表すのは世界の刻む鼓動であり、生命のゆるぎないパワーであり、万物に宿る魂の力強さなのだ直感的に感じた。これは日本特有のアニミズム的な思想が産み出したものなのかもしれない。あるいは太古、彼らが大地に向けて放った祈りであるのかもしれない。しかしそうした信仰や思想の先に彼らが行き着いたのが“流れ”という抽象的ではあるがそこに命を宿らせた、力強い概念であつたのではないか。

我々の生きている時間は短く、生まれた瞬間からいつか死ぬことは確定的である。僕のクラスメートだってあと100年も経てばほぼ全員が死ぬはずだ。人間に限った話でなく、生きとし生けるもの全てが死という終着に向けて日々歩を進めている。実に儚く、一瞬の出来事のように思えるがしかしその間我々の身体に宿った命は大きく流れ、激しく渦巻き、パワーを発散し続けている。事実縄文の人々がそんなことまで考えていたのかは残念ながら知る由もないが、しかし確かに私たちが作品を作ったり、あるいはそれを見て感銘を受けたりするのはそうした見えない強力なエネルギーに突き動かされているところがあるといえるのではないか。

2011年に行われた親鸞の750回忌ではこんなことばが東本願寺の壁を飾った。“今、いのちがあなたをいきている”僕は仏教徒ではない。しかしながらこのことばからは生命力というものの不思議さを再度実感させられた。決して生命は肉体に固定されたものではなく、過去からここまで、そして未来へと延々と流れゆくものなのであるという流動の考えは、はるか昔縄文より多くの人に受け継がれてきた確かな思いなのだと思う。そしてそれを人間という生き物は偶然にも他の動物より敏感に感じ取り、今我々の体内に流れ込んできた巨大なエネルギーをどうにかして自身のものとして、ひとつの固体

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

図2 猪風来 《虚空へ》

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

図3 猪風来 《洞の花》

として昇華させたいという強い思いが湧き起こったのではないか。どうかして自身のエネルギーとするべくそこに渦を巻き起こさんとしたのではないか。そうして生まれるもの、一種の衝動的な感情によせられた思いが今でいうアートとしてかたちになったのかもかもしれない。

あらゆる流れは刻々とその様相を変え、時に思いもよらぬ分岐を見せることもある。それを目の当たりにし、明日の僕たちは、そして僕は一体何を作り出すのだろうか。

引用資料

フリー百科事典 ウィキペディア日本語版
 (“縄文土器”項目)

アクセス日 2015/9/18

図版出典

図1 千葉昇 監修・指導『卑弥呼・三内丸山遺跡・古墳【旧石器・縄文・弥生・古墳時代】』（あかね書房)

図2 猪風来『猪風来美術館HP』 <http://www.ifurai.jp/tenji/tenji.html>

アクセス日 2015/9/18

図3 ARTS OF JOMON(NPO法人 jomonism) Facebook

<https://www.facebook.com/ArtsOfJomon>
アクセス日 2015/9/18

大賞

地中からの美

松尾 華子 浜松学芸高等学校 2年

「空間が美しい」、そう感じたときに、私はコンクリートに囲まれていた。

「美しい」という感覚はどこから生まれてくるのだろうか。景色、絵画など美しさの源は数えきれないほど存在するが、私は空間そのものに強く美しさを感じた。香川県、直島にある地中美術館。そこは地下に埋設された自然と一体化した遺跡のようだった。初めからそこに埋まっていたように見えるが、建物はコンクリートでできている。自然と人工が入り混じる奇妙さは心地よくてたまらなかった。

館内には様々なアーティストの作品が展示されていて、どれも魅力的であった。なかでも、ひととき私の心を揺さぶる作品、その空間に足を踏み入れたときに私の目をくぎづけにした作品は、「黒い球体」。ウォルター・デ・マリアの「タイム/タイムレス/ノー・タイム」それは私の意識を集中させるのに十分なインパクトだった。一つの球と金色の木彫たち。そしてそれを取り巻く空間により、私は異空間にいるような感覚に陥った。静寂の中に存在している物体、周りを見渡せばコンクリートの壁が広がっている。無機的、虚無的でありながら、一方で温かみを強く感じる。そこには自然光が天井から降り注いでいたのだ。これほど柔らかくて豊かな光は無いと思うほど、私は虜になった。最初に感じた好奇心や興奮は、心地よさにかき消されていた。意識を緩めて空間に身を任せて刻々と変化する光と影を眺めると不思議だ。神秘的でまるで、時間が止まったように感じるのに光と影は少しずつ変化している。時間は確実に流れているのだ。「静」と「動」は私を現実から引き離し、一つの空間に取り込んだ。私は逃げられない美しさにつかまってしまったのだ。

美しさの余韻に浸るとともに、この作品を生み出したウォルター・デ・マリア

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

「タイム/タイムレス/ノー・タイム」2004年

のことを知りたくなった。彼はアメリカ合衆国カルフォルニア州で生まれた彫刻家であり、音楽家でもある。様々な芸術活動に関与し、数多くのインスタレーション作品を生み出した。インスタレーションとは、現代美術の表現手法であり、様々な素材を組み合わせることで構成した「空間」全体を作品とする芸術のことである。私が地中美術館で見た作品もインスタレーションであるが、やはり空間そのものに美しさを感じた。空間の物質全てが関係をもち、互いの魅力を引き出す作用をしているようだ。もしそこに自然光が降り注ぐのではなく、人工の光が照らしていたら、いや、いつそのこと光を遮ってしまったらどうなるだろうか。美しいと思うかもしれないし、気に入らないかもしれない。いずれにせよ、その空間に私が当初感じたものと同じ感想を抱くことはないだろう。一つの要素を変えるだけで、そこには全く違う作品が生まれるのだ。それこそがインスタレーションの面白いところだと思う。作者の意図は正しく感じ取れていないかもしれないが、むしろその点は気にしないでいいと思う。作品は私たちが鑑賞して初めて、「芸術作品」となり、私たちの内側へと取り込まれるのだ。人が対象にもつ印象は三者三様、人の数だけあると言ってよいだろう。人の美的感覚が作品を変化させるのだ。

地中美術館を設計した安藤忠雄は、デザインを極限までシンプルにしている。

鉄、ガラスやコンクリートを使用した空間は空虚感を感じさせながらも、開放的な建物から差し込む光により充実した安心感を感じさせる。矛盾しているように思えるかもしれないが、そこにこの美術館の魅力があるのではないかと思う。むき出しのままのコンクリートから、押し返すような硬い「物質」を感じる。触れると冷たい。しかし、もう少し広い範囲で空間を見れば、そこには光がある。温かい。視点や範囲を自身で変化させることで、新しい見方を見つけ、自分の空間を作り出すのだ。「空間の構築」は無意識に行われ、私たちの日常から「美しい」という感動を生み出している。その感動は日々人々が生み出し、積み重ねて芸術の糧とするのだ。それは誰もが知らず知らずの間に日常生活の一部としている。この先もずっと。

「美」の対象は少しずつ広がっていくと思う。一部だけを対象にし、他は全て排除してしまう考えは幼稚だ。少し離れて周りを見れば、「美」は無限に広がっている。そこに一歩足を踏み入れると、自分の中の美の価値観が変化していくだろう。絵画だけを美しいと思っていた私は消極的で極端であったが、空間の美へと目を向けることによって視野を広くすることができた。地中のコンクリートと光は作品たちの魅力を引き出し、私に「空間の美」を教えてくれたのだ。

図版出典

「Shikoku Anthroposophie Kreis」
(<http://www.shikokuanthroposophiekreis.com>)

優秀賞

〈存在〉するアート

伊木 さなえ 愛知県立岩倉総合高等学校 3年

展示室の仕切りを越え、視界に入ってきたのは5メートルを超える巨大なキャンバスだった。真っ白なキャンバスの両端から様々な色の吹き流しのような線が8本ずつ伸びている。線は斜め中央に向かって緩やかな弧を描いて流れ、画面の下端で切れている。それ以外には何も描かれておらず、広い余白だけがある。これが「デルタ・ミュウ」との出会いで最初に確認できたことだった。

まず目に付いたのは両端の線で、自然と頭に浮かんだのは「虹」だったが、カラフルな線は秩序正しく並んでいるわけでもない。そこで次にイメージしたのは、子供のおもちゃやゴム風船といったマットで人工的な色味のものだった。しかし、アクリル絵の具の均一な色面がそう感じさせるのであって、配色から感じる印象ではなかった。

例えば、ショッピングセンターの広告の中で、様々な商品の写真を見ると、一つ一つは清潔感や美しさなど、デザイナーの伝えようとするイメージをもっている。しかし、それらが一つの画面に収められると、イメージは相殺され、一言で表現できるような印象は感じられなくなる。この作品もカラフルで平坦な色が規則もなく並んでいるので、例えられるようなすっきりしたものが思い浮かばないのだろう。この配色は特に意図を持たないのだろうと感じた。

著作権保護のため図を省略

(高校生アートライター大賞選考委員会)

「デルタ・ミュウ」 モーリスルイス
(愛知県美術館)

この展示室には他にも抽象表現主義の作品が集められており、それらとも印象を比較することにした。サム・フランシスの「消失に向かう地点の青」は絵の具を飛び散らせたりして描かれた作品で、激しく火花のはじけるような音がした。そして、再びデルタ・ミュウの前に立つ

てみると、そこには「静けさ」を感じた。音を感じないということもまた、特定のイメージを与えない色彩であることに繋がるのではないかと考えた。

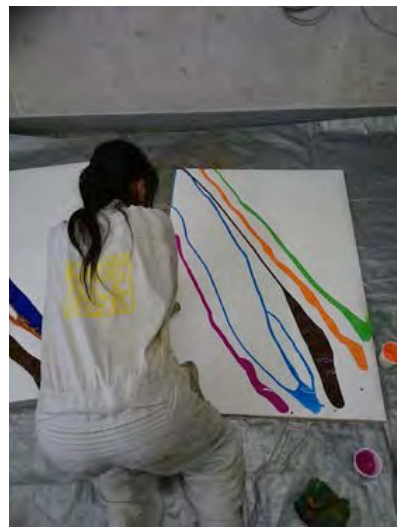
次に、作品の大半を占める余白に何かを見いだせないかと目を凝らしてみた。しかし依然として白は白のままであり、そのうち焦点の合わない不快感と、視界に画面全体が収まらないもどかしさを感じ始めた。この不快感には身に覚えがあり、高地から広大な景色を見たとき、多くの情報が頭に流れ込んでくる感じる頭痛に似ていると思った。それに対し、この作品は全く何も情報がないことがかえって不快感を抱かせた。

作品の中央に立っていると、両端の線が自分に向かって流れてくるように見える。また、画面の奥に向かって開く、両開きの門のようにも見える。急に足下が覚束なくなって、そのまま余白の中に飛び込んでしまいそうな気分になるのだ。そこで、余白というのは、単に何も描かれていない範囲ではなく、奥行きのある「空間」としての役割を持っているのだろうという考えに至った。

そして今度は、両端にあるカラフルな線の前に立ってみる。重力によって自然と生まれた絵の具の線は、柔らかくにじみ、巨大な生物がゆっくりと動いているようだ。それから、約10歩分ある作品の前を横切ると、左端の線が遠ざかり、右端の線が近づいてきて、大きな色の柱の様に感じた。下から見上げると、作品には額がついていない。白いキャンバスは展示室の白い壁と一体化し、まるで空中にカラフルな線が浮いているかのように見えた。私はその時、両端の線は、ただキャンバスに描かれた線ではなく、実体を持った色の塊であると思い始めた。

ここまで、色には意図がなく、余白は空間であり、カラフルな線は質量を持った実体であるという発見があった。この三つから、何が描いてあるかは問題ではなく、白い空間の中に色という大きな物質が存在するのがこの「デルタ・ミュウ」という作品であると解釈したのだ。

それから、作品から読み取れることだけでなく、作者の感覚というものを実感



しようと、デルタ・ミュウの制作を模擬体験することにした。板に取り付けた紙の上にアクリル絵の具を流して色の線を作る。流れる絵の具は、傾ける私の角度から見ると、地表を流れる1本の川の様である。真っ白な紙が最初の1本で区切られた瞬間というのは、稲妻など一瞬の自然現象を見たときに似た感覚がした。また線が増えて枝分かれすると、植物の根が成長していき、線と線の間に沢山の余白が形作られていくようにも見えた。自分の意志の及ばない線はもどかしく、また美しくもある。作者はこの自然と生まれる形に、それ自体が意思を持った有機的な何かを求めているように感じられたのだ。

また、私が作った模擬作品は1メートルほどで、デルタ・ミュウのように大きな空間は感じなかった。そこで、デルタ・ミュウの持つ余白は鑑賞者をも作品の一部に取り込み、見る者により色の存在を強く感じさせるのだと考えた。

日常では素通りしてしまうような「感覚」そのものをダイレクトに伝え、鑑賞者の根底に流れる本能のようなものに呼びかけてくる。この作品と向き合い、言葉に置き換えてみることで、そんな抽象絵画の意義と魅力を再確認することができたのである。

色を創造するとは一体どういうことであるのか。「コピー」ではなく「創造」である。この事について深く考えさせられた体験がある。

中学3年の初夏、私は大分県を訪れていた。山奥だったので、ホテルもたくさん飛び交っていた。しかしその上には、うごめく無数の光に負けない幾千もの星々が輝いていた。私はあまりにも美しい星々に言葉を失った。だが、それ以上に私を感動させたものがある。星の後ろにいつまでも続く、漆黒の宇宙である。その闇は輝く星々をそっと支えるかのように、世界を包んでいた。たった今、「漆黒」と表現したが実際の色は勿論黒色ではない。じっと見つめていると、どんどん吸い込まれるように様々な光や色が感じられるのである。黒でもない白でもない、紫でもないでもない黄でもない。そんな宇宙の色を私はしっかりと心に焼き付けた。

あれから約一年経った頃、私はあの闇の美しさをふと思い出していた。私の住む街中ではあんな深い闇を滅多に見ることが出来ないからだろう、とても鮮明に記憶が残っていた。その記憶を失くさないように、いつまでもそのまま残り続けるように、その闇の色を画面上に再現しようとした。——でも出来なかった。あのとき感じた色をしっかりと残そうとしてみた。（私はあの宇宙のこういう色に感動したのだ こういう奥深さに感動したのだ もっとこういう……）しかし出来なかった。あの日見た宇宙の復元はこれっぽっちも出来ておらず、かなりかけ離れたものになってしまっている。全然違う。全然違う——のだけれど、私はその画面に「見た宇宙以上に宇宙らしい世界」を感じていたのだ。

私はそれがなぜか分らなかった。自分の感動を追うあまり、実際に見た宇宙とはかなりかけ離れてしまっていたのに、私はそれ以上に宇宙を感じている。不思議だった。思考を逆に考え

てみる。するとその理由は私を一瞬にして納得させた。見た宇宙以上の宇宙が広がっているのは、自分の感動や想いを画面上に投影しているからなのだ。私は色を作る時、その時の宇宙に対する感動や気持ちを色にふんだんに取り込んでいた。本来の制作の目的である“あの時見た宇宙の色を完全に再現する”という事を完全に忘れて自分の感動中心に描いていた。それが良かったのかどうかは分からない。しかし、画面上には見た宇宙以上に宇宙らしい世界が広がっていた。

見た色をそのまま写す『色のコピー』はできない。「パソコンやカメラならコピーなんて容易くできるじゃないか。」と思うかもしれない。でも出来ていないのが現実である。例えばポストカード。展覧会で、感動した絵のポストカードを買おうと売店に行くとする。しかし、「え、これ!？」と疑うほどに全く違う絵になっていることがしばしばある。もしも——何十年、何百年先に見た色と全く同じ色をコピーできるカメラなりパソコンなりが生まれたとしよう。しかし、そうしてコピーできた作品のレプリカに、私は本物の作品と同じように感動できる自信が無い。それは単なる「コピー」であるのだから。本物を見たときの感動や発見が色に投影されることはあり得ないのだから。面白味も何もないものになってしまうのは目に見えている。

自分の感動や想いを投影した「創造した色」が「コピーした色」より広い世界を持つ。この事は美術の中ではよくある事だと思う。具体例としては模写作品が挙げられるだろう。模写作品はその名の通り模して写した作品の事であるが、勿論決してコピーした作品で無い。作品を見たときに何かしら心惹かれるものがあるからだ。それは制作者が模写する際に、原画を見たときの想いを少なからずや色に投影しているからではないだろうか。

さらに「創造した色」というのは本来の色をも超える広がりを持つ。東山魁夷という日本画家がいる。彼の作品の「残照」にはこの創造した色がはっきりと表れている。

言葉では表現できない山の色や空の色からは、その画面にとどまらない広がりを感じるものだ。「創造した色」に対する「本来の色」というのはある意味で完成形だ。完成された色であり、その色のままであり続ける。しかし、「創造した色」は自分の感情や想いを投影した色だから、作者自身の感情の種類や起伏によって大きく変化する。一定ではない。そういう意味では「創造した色」というのは本来の色をも超える広がりを持つのであろう。

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

東山魁夷 『残照』
東京国立近代美術館 蔵

ここまで辿り着いて、私はようやく「色を創造する」の意味に気付いた。「色を創造する」という事は新しい世界の広がりをつくる、という事なのだ。自分の感情を色に投影することで新たな世界を広げられる。これほど単純で、大切に、難しい事は無いだろう。それでも私は、色をたくさん創造していきたいと思う。沢山、沢山創造して——そうしていつかは中学3年の夜に見た宇宙のように、果てしない世界を生み出せるようになっていきたい。

引用・参考資料

独立行政法人国立美術館所蔵作品検索<http://search.artmuseums.go.jp/records.php?sakuhin=2518>

「切断ヴィーナス」という写真集がある。その表紙には赤いドレスと黒いパンプスを身にまとった女性の下半身。その中でも一際目を引くのは赤いドレスのスリットから覗く左脚。機械のような見た目をしている。また、太ももに和柄の模様がプリントされており美しい。足には右足と同じように黒いパンプスを履いている。お気づきの通り、彼女の左脚は、義足である。

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

私は、ネットの記事で「写真展「切断ヴィーナス」が魅力的すぎる【越智貴雄】」という見出しを見た。切断という言葉への純粋な興味と、面白そうだなという好奇心でそのサイトを開いた時、私は「切断ヴィーナス」と出会った。義足ながらも懸命に生きている女性。美しい装飾の義足を身につけている女性。そこには義足を身につけながらも力強く生きているたくさんの女性の姿があった。私は今まで義足ユーザーの人に出会った事がない。きっと、この写真集を見る前に出会ったことがあったら私は彼らにいらぬ気遣いや同情のまなざしを向けていたかもしれない。しかし、この記事を見て、彼女達について調べていくうちに、私の彼女への思いは徐々に変化していった。

彼女達を写真に収めているのは越智貴雄さんというパラリンピック選手を撮り続けている写真家だ。彼は義足ユーザーが自分たちの思っている以上に手を貸さなければならぬ人達ではない事を様々な人に伝えようとしていた。

なぜなら、多くの人は義足ユーザーに対してかわいそう、手伝ってあげよう、と思っているからだ。義足ユーザーたちは決してそのような存在ではない。た

だ義足をつけているというだけでの腫れ物に触れるかのような扱いを受けるというのはあんまりではないか。義足のパラリンピック選手の中には私達よりも速く走る事のできる選手もいる。私たちが思っているよりも義足ユーザーたちは何かを“してあげなきゃ”いけない人達ではないのだ。

義足ユーザーにとって義足はメガネや洋服のようなものなのだ。その装飾品がオシャレなら嬉しいだけではなく、自信が持てるだろう。私達にお気に入りの洋服やアクセサリーがあるように、彼女達にもお気に入りの義足がある。義足は、切断ヴィーナスたちの特別なアクセサリーなのだ。

そんな彼女達の世界でたった一つのアクセサリーを越智貴雄さんと共に作品を作り上げていっているのは義肢研究員・義肢装具士の白井二美男さんだ。彼は義足ユーザー達に自分を着飾る楽しさや自身、堂々と見せたいという気持ちになってもらうために、お気に入りのアクセサリーになるための条件を一つ一つ叶えた。例えば、走りたいと願う人には速く走れる義足を、ハイヒールを履きたいと願う人には女性らしい美しい義足を、本物の足が欲しいと願う人にはリアルな義足を作った。それらは、自分だけの物であり自分らしさ、個性がその一つの物にぎゅっとつまっているからこそ義足ユーザーは自分の義足が宝物なのである。

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

「切断ヴィーナス」。その言葉の中にはたくさんのものが込められている。美しさ、力強さ、儚さ、時に刺激の強い、まさに「ショッキング」なものまで。両手両足のついた私達には計り知

れないほど、義足ユーザーたちは色々な人の不眠な視線や態度に怖がりながら生きてきた。そんな時代はもう終わりにして、自分らしい義足という名のアクセサリーを身に着けて堂々と歩ける事はどんなに嬉しい事だろうか。そんな時代を作るためには、私達が素敵だと思う事で、初めて義足ユーザーへの偏見のない時代がやってくる。「やってあげなきゃ」を「その足、素敵だね」に。ヴィーナス達が前を向き、歩いていく。やりたいことをほかの人と同じようにやれる。そんな時代が来るのはそう遠くないだろう。

私は記事に載った彼女達の振る舞いや言動を見て、単純にかっこいいと思った。見る前と見た後の義足への感じ方の変化は自分自身とても驚き、彼女達を調べれば調べるほど、彼女達の一本筋の通った強みが溢れていく。彼女達の強さ、義足の魅力が多くの人に伝わり、その中で足を失った人達が希望を持ち、前を向いて、きっとまた歩き始めることができる未来が待っているはずだ。

《参考文献》

書籍

2014年5月29日初版/切断ヴィーナス/越智貴雄/白順社

HP

生きた義足がここにある一著者インタビュー『切断ヴィーナス』越智貴雄

<http://sp.ch.nicovideo.jp/ch711/blomaga/ar543245>

写真展「切断ヴィーナス」が魅力的すぎる【越智貴雄】

<http://matome.naver.jp/m/odai/2136679971231166901>

越智貴雄WEBサイト Photographer Ochi Takao

http://www.ochitakao.com/project/gallery_01/

「私は光を使って美術作品を作っているけど、それをお姉ちゃんに見せることができない。」そういうジレンマが、自分の中にずっとあった。

2年前ぐらいから、姉は病気の症状で光と音に自由に触れる事が出来ない。自宅の中で光と音を遮断した設備の中、横になって暮らしている時間が最近では長くなっている。私の都合がつかなくて、昔に比べてゆっくり話せる時間はぐっと減ってしまっている。

私は高校で舞台芸術を始めて、光を考える舞台照明の担当になった。仕事にとっても誇りを持ち、意欲的に勉強して舞台上の機材を使った多様な演出が可能になった。いつしか光は私にとって一種の素材のような存在になっていた。

だけど制作に対する意欲とは別にずっと姉に対して感じる精神的なしこりがあった。私と話せたらとても楽になると言っていたのに、学校や塾が忙しくてなかなか話せない事、姉が今触れたくても触れられない光を使って制作しているという事。

積極的に作品を作って行こうとしていたが、作る手が止まってしまった。これ以上こんな気持ちを引きずるのは良くないと思ったし、良い方向に持って行く術があるはずだと思った。

そして夏休み、時間を取らせてもらって姉と2人でゆっくり話をすることにした。「光」のはなし。

限られた時間ではあるけどあくまで日常会話の延長線上。普段話せない姉と話す時間を制作を通して作り出す行為でもある。いつも話すようにならぬ話をして疲れないようにしながら、2人で光にまつわる事を話した。

2日間普段なら先ず叶わない程の量の会話を交わし、姉の経験からヒントを貰い、見えてきた事がある。

恋人を身長や顔で選んだ人は、ある日も視覚が使えなくなったら恋が終わるのか？

光が無いと人間何も見られない。視覚という感覚は曖昧で、不確かな感覚だという話になった。何も気にせず生きていたら目で見えている情報はかなり大きい。私の日常で言えばデッサンという行為も、見る事を追求したうちの一つなのではないだろうか。勿論論理で考えて描く物でもあると思うが。恋愛に対しての捉え方も同じではないかと2人で考えた。相手のルックスに重きを置いて恋人関係を結

んでいる人は見る事が出来なくなったその時に、愛情の浅さに気がつくのではないか。理想とされる在り方は視覚以外の五感やもしくはそれをも超えた、様々な感覚が織り混ざった状態の好き。見る事に集中して視野を狭めて生きてしまうのは、あまりに勿体ない。

本当に自分って存在しているのかなんて、皆分からない。

暗闇の中では人の感覚は丸裸になっている。これは舞台芸術を考察する上でも気にしていた事だ。暗転設備の整った劇場の中、物語の場面設定、感情表現に合わせて変化する舞台照明。意識は身体を離れ、演出の中に溶け込んで行く。

生きて行く中にも同じ過程があると気がついた。ずっと暗闇の中に居たら、例えば今本当に自分に身体が存在しているのかは、実際に手で肌を触ってみないと分からない。世界が存在しているのかは、壁を手探りで見つけて今居る空間の終わりを見つけないと分からない。毎朝鏡で顔を確認したり、携帯電話のカメラで写真を撮ったりするのもそういった安心感を得るためなのかもしれない。

芸術に関わったからってお腹がいっぱいになるわけじゃないけど…

漫画や映画が流行ったから障がい等への偏見が薄れる事があるように、芸術には大きな社会的影響力があると話した。どうしても社会的に冷たい目を向けられる要素を柔らかい印象に変えてくれる。

これからも表現をやりたい私にとって大きな励みとなる言葉だった。制作する

という事の意味も見つかった気がした瞬間だった。

対話を終えて、二つのアウトプットを行った。

行った姉との対話を、姉の部屋の写真も合わせてファイルにまとめて記録した。

(図1)そして会話の内容から発展させて、更に2人で試行錯誤しながら姉への贈り物を作成した。(図2)これは人形の柔らかいストレス解消グッズと私が参加した作品の舞台美術に用いた幕とよく似た素材を使って、姉に少しでも作品を感じてもらおう為の試みである。そして大きな安心感に繋がると話した感覚に、優しい感触を与えるという効果も同時にある。私が隣で実際に作品の中で流れた歌を口ずさみ、姉には手触りを楽しんでもらう。体調の良い時間帯には、調節した光の空間で実際のビジュアルも楽しんでもらう。「姉と私で共有する事で成立する作品」となった。

今回の取り組みが果たして芸術作品と呼べるのかはまだ分からないし、これから制作をする始まりなのかもしれないと思う。取り組まなかったら存在しなかった時間が生まれ、会話が生まれた。新たに見えた問題もあったが、会話や制作を通して緩和できた問題もあった。

芸術に関わったからといってお腹が膨れる訳では無いし眠気を取ったりする直接の方法になる訳でも無い。だけど直接生きる事に関わる以上に価値のある、人に寄り添う事の出来る力が芸術にはある。人の存在全体を包み込むように心を動かす事が芸術には出来る。その最適な表現を探して行きたい。



図1:「光」のはなし

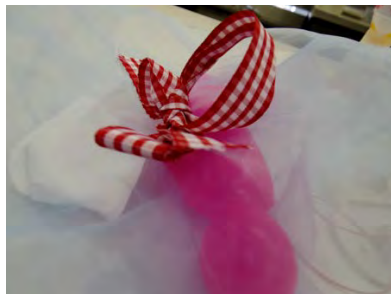


図2:柔らかくてあたたかい光のような「なにか」

優秀賞

アートが繋げるもの

久保 美萌理 佐賀県立佐賀北高等学校 3年



「はらぺこあおむし」貼り絵作品 作者・子供たち

何かひとつのものを多数の人と作り上げる。特に芸術作品を作り上げるのは至難の技だ。一人ひとり感性が違い、良い・悪いの判断基準の違いがあるからだ。だが、「完成」という頂へと進む意思はひとつなのだ。それが意識している事でなくともちゃんと完成への道を「アート」は繋げてくれる。私はあるボランティア活動を通して人とアートの関わりを見てきた。

そのボランティアグループは、あの東日本大震災が起きて一年後に美術部の先輩達が立ち上げた。減ってゆく報道、支援のあり方に疑問を抱き、何かできることはないだろうか、という思いからだった。私がリーダーを引き継いでからの最初の活動はある母親達の団体グループとのコラボ企画だった。イベントを訪れた子供たち向けの「貼り絵」のブースの活動だ。直接東北支援とは関係ないが、地域との繋がりを深めるために引き受けた。エリック・カールの『はらぺこあおむし』を題材に、貼る紙はあの独特な重なりから生まれる色合いを出すために和紙を利用した。そこまでは良かったのだが、いざ子供たちと貼り絵をすると、とても大変だった。和紙をちぎって貼ると説明したのに和紙を丸めてベタッ。正直、子供たちの自由すぎる発想力で貼り絵は完成するのだろうかかと心配だった。私はその時、完璧な完成予想図を頭に画いていたのかもしれない。それとは程遠く離れていながらもなんとか全てを貼ることができた。きれいな色合いだね、と少し離れた所から声が聞こえた。私はまさか、と思った。もうかなり、はちやめちやな貼り絵だったので耳を疑った。だが、離れて見ると確かに、きれいだった。素直にそう私は認めた。所々にあの丸めた和紙が立体的に貼り付いているのが、それはそれで花のような感じに見えた。ただ子供たちが適当に色を選び、適当に貼っただけであるが、なんだか、色が遊んでいるようなのだ。あちこちに色が飛び散っていて、また違う『はらぺこあおむし』を見た。エリック・カールもびっくりだろう。子供たちの一人ひとりの小さな作

業が集まってひとつの作品になったのだ。ある意味、これも共同作業か、と私は気づいて嬉しくなった。「アート」が子供たちの自由さを引き出し、私は固定された完成予想図という枠から飛び出した。そして、子供たちが作った「アート」は私にもう一度何かをみんなで作り上げたいという思いの原動力となった。

次は東北の高校生と。ただ漠然とそう思った。しかし、東北と佐賀はとても離れており、実際に会って交流など、まず難しい。「絵だ。」と私は思った。絵を募集し、佐賀で東北の高校生達のリアルな思いを伝える。展覧会を作り上げよう。絵を仲介役とするのだ。絵のメッセージというものは文字が無くても伝わる強力なものだと私は考える。そして、作者の込める思いはその絵に注がれ、表れるはずだ。

打ち合わせをする段階で東北の先生から「対等な立場」での交流でもいいのでは、という考えをもらった。私はそれまで相手側と自分達側を「支援する・される」の関係でしか見ていなかった。交流する高校は津波の被害は逃れたが、校舎は全壊していた。だが、仮説住宅への訪問など「支援する」立場で活動しているのだ。そんな人達を「支援する」と言って良いのだろうか。逆に自立しようと頑張っている姿を紹介したいと思った。同じ高校生が日々奮闘している姿、負けず屈しない姿こそが伝えるべきことなので、と考えなおした。もう、四年経った。支援のあり方考えなおす時期なのかもしれない。まだまだ確かに支援は必要なところもあると思うが、最終段階は「自立」なのだ。このことは展覧会を開催する意味を考えなおす、いいきっかけとなった。そしてもうすぐ、展覧会は開催を迎える。

絵は少数ながらも集まった。その学校の活動写真も送ってもらった。本当に、私達と「同じ」なのだ。どこにでもいるような普通の高校生。その人達が「絵」となって佐賀に来てくれた。絵が仲介して繋げてくれた。

私は絵とは自己満足だと考えていた。だからこそひとつのものをみんなで作り上げるのは難しいし、だからといって人を引き離さない。寧ろ引き寄せる。子供たちの手がカラフルな絵を作り、私達に刺激を与えたように、そして東北と佐賀の高校生が絵を集めて展覧会を作ろうとしている。

人々にとってアートとは、何かひとつのものを作り上げる時、人と人との協調性を試される試練なのだろうか。アートがさりげなく、私達に困難を与え、そして乗り越えた先に、人との新たな繋がりがや信頼性を生み出しているように見える。私はこのボランティア活動を通して、人々がアートで繋がっていくように思えた。目には見えないが、しっかりとした何かか心に残る。東北の高校生と直接会っていないが、絵から伝わるのだ。繋げてくれるのだ。

この先もアートと人が交わる時、また新たな繋がりが生まれるだろう。



東北の高校生×佐賀の高校生コラボ企画の展覧会 フライヤー表・裏

自分が物を作る中で一番嬉しいことは、それがもらった人の笑顔になることである。作ることには、たくさんの失敗や困難もあった。しかし、その笑顔はそれを遥かに超えた喜びになり、素晴らしい達成感を得ることができた。相手の笑顔で、自分も笑顔に。作るということが幸せを運んだ瞬間であった。

それは、今年の春休みの出来事である。私は自分の卒業した幼稚園に、自分の作ったおもちゃをプレゼントした。しかしこれは自立的に行っただけではなく、学校の授業の課題として行ったものである。悪い言い方をすれば、やらずにはならないものである。

授業のテーマは、「物作りを通して人との関わりを創る」というものである。そのためどんな作品を作るかということももちろん大事だが、一番大事なのは、作品を作る相手との関わりである。いきなり相手に物をあげても、それは押し付けのようなものになってしまう。相手をしっかりと知ることによって初めて相手のためになるのである。私は人に物を作ることで何か感謝の気持ちを伝えたいと考えた。そこで決めた相手が自分の卒業した幼稚園である。私は幼稚園に自分の作ったおもちゃを作ることにした。それは決して簡単なものではなかった。小さな子供を相手にするので、大きさや形など安全な物でなくてはならない。また、より多くの子供と一緒に遊べるおもちゃを作りたいと考えていた。そこで考えたおもちゃは、ビー玉を転がして遊ぶというシンプルな物にした。工夫した点は、同じ形で4つ作り連結できるようにして多くの子供が遊べるようにしたことである。作品は完成したが本番はこれからである。

私は事前に幼稚園に電話をした。とても緊張していたが相手の先生は自分のことを覚えてくれていて、あたたかく返事をしてくれた。そして久しぶりの幼稚園へ。どんな子たち

がいるのか、もちろんわからない。入ると幼稚園はなんだか少し小さくなった気がしたが、ほとんど変わっていなかった。先生に挨拶をすると、早速子供たちを集めてもらった。みんなとても元気で、はしゃいでいる子もいた。集まった子供たちを見てみると、みんなが私の作ったおもちゃを真剣に覗きこんでいた。幼稚園の子供を相手に高校生ながら少し緊張していた。しかし、自分がお手本で一度やってみた時だった。子供たちは声をあげて、自分も遊びたいというようにおもちゃに近づいてきた。子供たちが自分のおもちゃにこんなに興味を持ってくれるとは思っていなかったのだから、とても驚いた。そして子供たちは自分の好きな場所に着き、遊んでくれていた。自分の作品が相手に渡る瞬間であった。(写真)

単純に誰かが誰かに物をあげることと考えてみると、当然もらった人は嬉しい。あげる人はその物を自分の手から失うのである。これも同じように、幼稚園の人はおもちゃをもらい、きつと嬉しい思いをして、私は自分の手からおもちゃを失った。しかしこれには、その単純な感情だけではないものがあつた。それは喜びである。私は子供たち



の笑顔から、自分も笑顔になった。もちろん他の場面でも、私は人に物をあげたり、もらったりしたことはたくさんあつた。しかし今回、その喜びとは全く違う素晴らしい喜びだった。作るという努力があつたから、大きな達成感を得ることができたのだと思う。その達成感以外の何よりも心に残り、物をあげる立場であつたにもかかわらず一番良いものを得ることができたと感じた。

それをきっかけに私は、箸置きを作り、お世話になっている近所の方や家族にプレゼントした。そのときも物を渡すことの喜びが感じられた。特に近所の人から、もらった箸置きを使っていると声をかけてもらったりすることでまた喜びが感じられた。物を渡すのは一瞬であるが、その人との関わりはその先もずっと続くのである。

またあの喜びを感じたい。それから人に物を作るということがもっと楽しくなつた。今回の経験から私は、物作りが人と人をつなげ、新しい関わりをつくることができるとことを知つた。努力して作った物は、人を笑顔にし、幸せを運ぶのである。

芸術の力とはどれくらい世の中に影響を与えるのだろうか。そもそも私は何のために芸術を学んでいるのだろうか。ふと疑問に思った。楽しいから？自分を表現したいから？それとも、何だろう…。私が絵を描いたり、ものを造り出すことで世の中のためになる事はあるのだろうか。今年の夏、自分なりの答えが見えた気がした。

私はもともと3年前の震災以前、宮城県に住んでおり、震災の影響で中学に入ると同時に京都に引っ越して来た。震災直後、親戚も周りの友達も皆残っているなか、私の家族だけ引っ越したのは、私にとって大きな苦しみであり悲しみだった。皆は大変な状況で頑張っているのに、私はこんなところで悠々と生活しているのいいのだろうか、一緒に支え合いたいのに何もする事ができない。初めはこんなことばかりが頭を巡り、とてももどかしい気持ちだった。

そんな中、私の通っている銅駝美術工芸高校で行っている「あなたの絵を贈ろう」という活動と出会った。それは被災地の宮城県の美術高校と、その他の県外の美術高校が協力して宮城の仮設住宅にお住まいの方々に絵をプレゼントしようというものだ。これなら私も力になれるかもしれない――。

こんなに誰かを思って絵を描いたのは初めてだった。言葉にはできないけれど、この絵を見た方に私の想いが伝わるように精一杯描いた。そして嬉しいことに、帰省とあわせて実際に、生徒会のメンバーと共に仮設住宅にお住まいの方々に絵を

配る活動に、私も同行させてもらえる事になったのだ。久しぶりの帰省。市内はすっかりもと通りになって活気づいているものの、2年ぶりに訪れた沿岸部は予想以上に殺風景だった。瓦礫の山こそ少なくなったものの、見渡すかぎりの原っぱが広がり、津波の被害が生々しく残った建物がぼつぼつ建っている。

震災から約3年半、ニュースでの被災地の情報も減りつつある今、現地に行くまで未だにこんなにも多くの人々が仮設住宅で暮らしているということも知らず、現状をみてショックを受けた。仮設はあくまでも「仮設」なのだ。3年目は明らかに無理がある。「少しでも勇気づけた」という思いが募っていった。しかし、イベントが始まって私はとても驚いた。どれにしようか…とひとつひとつ丁寧に見てまわられる住民の方々の表情は、どれも笑顔で溢れていたのだ。「毎年このイベントが楽しみなんです！」「1枚にしぼりきれない！もう一枚もらってもいい？」「絵を部屋に飾るだけで部屋も気分も明るくなるんです！」など沢山の言葉をかけていただいて、とても嬉しかった。他にも他校の高校生がつくった木工のおもちゃで小さな子ども達が楽しそうに遊んでいたり、絵を囲んで明るい会話が弾んだり。

そんな笑い声を聞きながら、「ああ、自分が学んでいる芸術にはこんなに素晴らしい力があるんだ…」と思った。勇気を届けたくて行ったはずが、自分自身何倍も勇気ももらい、自分の中の大事なものにも気づく事が出来た。

芸術には人を幸せにする力があるのだ。幸せにするといったら、たいそうなことに聞こえるかもしれないけれど、案外身近なことだったのかもしれない。もちろんあの場で明るい面ばかり見たわけではな



2014年 宮城県 名取市閉上の空と家の跡

く、まだまだ復興は終わっていないし、絵をみて津波で亡くなったお孫さんを思い出されたりと、簡単に人々の心の傷は癒えるのは難しい。

そして現在、5年後の東京オリンピックによって、家が流されてしまった方々のための新しい住宅の工事が進まないそう。復興を後回しにしてまで都市の開発を進める現状。優先順位とは？と聞きたくてしまう。実際に訪れたからこそ見えてくる問題がたくさんあった。また、仮設住宅で孤独死する高齢者の方々の数が急激に増えているそう。だからこそ、人と人とのつながりは今まで以上にとても大事になってきている。

震災はまだ終わっていない。故に私はこれから何をしていけばいいのか考えていく必要がある。今回の経験で、気付きと課題が見つかったからこそ自分はひとまわり大きくなった。私だからできること。自分の力を最大限生かせること、それは芸術だと思う。

芸術作品を見ていると思ってもみなかった発見や、物の見方の変化、気付き、人の心に何か変化が生まれる。私はそんな作品が造り出せるようになりたい。もつと言うと、見た人が思わず笑顔になるものが造りたい。そしてずっと長くその人の生活に寄り添っていけるような…。そのために色々な事を経験していこうと思う。震災の経験も今こうやって大きな自分の糧になっている。嫌な事も楽しい事も全て自分の物にして、もの造りをしていきたい。



2014年 宮城県 名取市閉上 慰霊塚

「+d」をご存知だろうか。アッシュュコンセプト株式会社が2002に「デザインを通じて生活に楽しさや喜びを生み出すモノ作り」をするブランドとして立ち上げたものである。生活にデザインをプラスすることによって、生活に新しい何かを生み出すことを目的としている。今では文房具や日用品が作られていて、どれもオシャレで機能的だ。たとえば、「animal rubber band」という動物型のシリコン製の輪ゴム。これも「+d」の作品で、使っても使っても元の動物型にもどるといった特徴がある。そのため、ちょっとした贈り物に輪ゴムではなくこの動物型ゴムを使えば、相手を楽しませることが出来るし、つついなくしてしまったり捨ててしまったりする輪ゴムにかわいいデザインを施すことによって、愛着がわくし、使い捨てなんてもったいないことができなくなるという効果もあるのだ。使うのを想像するだけで楽しそう。また、「Birdie」という作品もある。これは、小鳥型のペーパーナイフで、小鳥のしっぽの部分がカッターになっている。握りやすいし、置物として置いてもかわいい。最近は電子メールが主流のデジタルな時代になったが、手紙というアナログなツールには、ちょっとした楽しみがある。そんな楽しさを引き出すための道具として作られたものだろう。このように「日々使うもの」や「あまり使わないもの」に「デザイン」を“プラス”することによって、日々の生活に新しい発見や感動をもたらす手伝いをしていくのだ。

その「+d」の作品のなかで、1番印象的だった作品は「UnBRELLA」だ。初めに見たときは、形が奇抜すぎてなんだか信じられなかった。普通の傘は上が

広がっていて下に向かってすぼまっている逆三角形型なのだが、この傘は上がすぼまっていて下が広がっている円錐型だったのだ。どうやって開くのだろうと思ってみると、開き方は普通の傘と同じだったのだが、開いたときの形が独特で、ちょうど普通の傘が強風で反対側に反ってしまったような形で、傘の骨が丸見えになるのだ。私はどうしてこんな形にしたのだろうと思った。今までの傘に特に不便を感じたことはないし、あの逆三角形の形に違和感もないし、なによりわざわざ普通からはずれたことをする必要を感じなかった。だから、使いにくそうだななんてことも思った。

ところが、調べてみると、この傘には今までの傘にはなかったものがあるとわかった。それは「他者への思いやり」である。普通の傘はたたむとぬれている面が外側にくる。もし、そのぬれた傘を持って満員電車に乗ったらどうなるのだろう。きつと、無意識に誰かの服や靴をぬらしてしまうだろう。でもこの傘なら、ぬれた面は内側に折りたたまれるため、誰の服も靴もぬらさない。また、雨の日は傘立てがいっぱいになって自分の傘が分からなくなったり、いっぱいの中に自分の傘を無理に入れようとして傘立てがぐちゃぐちゃになったりしてしまうこともある。でも、この傘なら下に広がっているから、傘立てにいれなくても「自立」してくれるのだ。そうすると、他の人が傘を入れるスペースができる。また、自分も自分の傘を見つけやすい。さらに、骨が外側にあるおかげで、歩いているときに骨が頭に当たったり、髪がからまったりといった痛い思いをしなくてもすむ。ただでさえ憂鬱な雨の日に、傘のせいでもっと憂鬱になったらなんだか嫌だ。でもこの傘

は憂鬱にするどころか、雨の日を楽しくしてくれそうだ。つまりこの傘は、相手を思いやりかつ自分も楽しむというすばらしい傘だったのだ。

きつと、この傘の発案者は、雨の日を誰にとっても楽しいものにしたかったのだろう。みんなを楽しませるためにはどうしたらいいだろう。そう考えたから、雨の日には誰もが使う「傘」にデザインを“プラス”して、今までになかった傘を作り出したのだと思う。簡単に言ってしまうと、「傘の形をひっくりかえした」。ただそれだけなのだが、私はこの傘を知って衝撃を受けた。そして、今まで「普通」だと思っていた傘が「普通」ではなく、不便なものを感じる。逆に「+d」の傘が「普通」だと感じるようになってしまった。何かを変えたいという思いをもったデザインはモノの形だけでなく、人の意識まで変えてしまうのだ。この傘から学んだ。

デザインには力があると思う。普段の生活にほんのちょっとデザインが“プラス”されるだけで、普通を変えたり新しい発見が生まれたりする。また、人を喜ばせたり、驚かせたり、空気をかえたり。私はそのデザインを追いかけていきたいし、私も日々の生活にデザインをプラスして、何かを変えてみたい。

引用・参考資料

+d アッシュュコンセプト【オフィシャル】 デザインプロダクトshop. (shop.h-concept.jp/fs/hshop/c/07、2015年10月11日アクセス)

+d-アッシュュコンセプト(www.h-concept.jp/plusd/index.html、2015年10月11日アクセス)

優秀賞

Shellphone—命の想いを繋ぐ—

杉浦 沙季子 学習院女子高等科 3年

わたしは、悲しくて、あの貝がらに耳をすました。
そしたら、きみと出会った、あの海の音にまじって、きみの声が聞こえた。

「だいじょうぶ。
ぼくの姿はもうないけれど、いつでも、いっしょだよ。」

これは、絵本『Shellphone』の最後の場面に登場する文章だ。絵本『Shellphone』とは、「永遠の別れ」をテーマに、私が高校3年生の春に制作した作品だ。

絵本の読者とは主に子どもであるため、単純明快で前向きなテーマが多いと思われるのだが、死の描写が登場する絵本は意外にも多い。例えば、『ずーっとずっとだいすきだよ』や『100万回生きたねこ』や『わすれられないおくりもの』などは、幼い頃に読み聞かせて出会ったことがある人も多いだろう。私もその一人であった。しかし、それらは幼い私にとって、お気に入りの絵本にはならなかった。おそらくそれは、私がまだ身近な人の死に直面したことがなかったため、絵本に漂う独特の悲しさや優しさや死の雰囲気馴染むことができなかったのだろう。

しかしそんな私にも、身近な人に死が訪れた。それは中学2年生のことだった。入退院を繰り返していた祖父の死は、いつ訪れても受け止められるように覚悟していたつもりだったが、実際に祖父の亡骸を前にして、これまで感じたことのない悲しみと悔しさが涙になって止めどなく溢れた。それまで分かっていたつもりだったが、時も人の命も永遠ではないのだ。

そして私は、祖父の死を経験してから、「死」の意味を考えるようになった。しかし、確かな答えが得られないまま、今度は祖母が入院することになった。あの時のような恐怖や悔しさ、悲しみを感ぜたくない、しかし人には必ず死が訪れる。私は、必ず経験する身近な人の死を、生きる者は一体どう受け止めればいいのか、と考えた。そして行き着いた先が、絵本『shellphone』だ。私はこの絵本制作を通して、私なりに死に対する答えを得ることができた。

私は幼い頃、死の絵本をなんとなく遠ざけていたが、死を身近に知った今、読み返すと、深く優しい感動が心の真髄にまで沁み渡り、慰められる。そして私は、絵本という表現には、死や命の形に通じるものがあると考えた。絵本は、読者がページをめくり、文と絵を読まなければ、物語は進まない。しかし、その物語には必ず終わりが訪れる。絵本を読むということは、命との対話にどこか似ているのだ。だから、人は絵本を読むときに、絵本の物語と心を通わせているように感じ



① きみと出会った、あの砂浜。いつもいっしょに貝がらをひろったね。



② 知ってる？貝がらに耳をあてて、すましてごらん。海の音が聞こえるでしょ。貝がらが、生まれた海の音を覚えているからなんだよ。



③ 小さかったきみは、大きくなっても、丸くなってねもっていたね。でも、ある日、きみは丸くなったまま目を覚まさなかった。



④ わたしは、悲しくて、あの貝がらに耳をすました。そしたら、きみと出会った、あの海の音にまじって、きみの声が聞こえた。「だいじょうぶ。ぼくの姿はもうないけれど、いつでも、いっしょだよ。」

絵本『Shellphone』(360×500mm、木炭紙・木炭・水彩絵具、2015年)

るのかもしれない。そして私は、祖父の死を経て実感した、生きることや大切な人との出会いへの感謝と温かさを、私なりに絵本で表現したいと思った。

作品は「海」を舞台に展開していく。それは私が、海は命の原点だと考えるからだ。海は生命誕生の場である。そして私は、海には生きることの真理があると思う。海には絶えず波が立ち、次の波へと繋がり、また新たな波が立つ。その波間には、幾数もの小さな泡が漂い、消えていく。私は、一つ一つの命とは、そんな泡のような存在だと思う。命は、波から波へと繋がり、次の未来へと新しい命を託していくのだ。そして託された私たちは、その命の存在が無くなっても、忘れずにその存在を想い、伝え続けることができる。そこで、命の想いを繋ぐ、という意味を込めて、作中に登場する貝がら(shell)と携帯電話(cellphone)をかけて、作品を『Shellphone』と題した。

猫の「だいじょうぶ」という言葉から、少女は死に対して、恐怖や不安でなく、大きな安心感を抱く。作品の絵は、命の儚さと強さを表現するため、木炭で描いたが、クライマックスとなる最後の場面にも、水彩絵具で波の描写に透明感のある彩りを加えた。それは、これまでモノトーンで続いた場面から、猫の死を受け入れる少女の安心感や未来へ踏み出そうとする心情を、強く明るく表現したいと思った。そんな作品の語り手である主人公の少女は、私自身の姿と重ね合わせた。制作を続ける中で、次第に私の心も晴れていくのを感じた。

“永遠の別れ”というテーマに真剣に向き合い、今回の絵本を制作することで、私は私なりの答えや考えを持つことができた。そして私は、死について向き合い、考えることは、人と人との繋がりが薄れていく現代社会で、重要なことを気付かせてくれると思った。死を身近に感じる機会が少ない現代で、人は命や心や絆を軽視しがちになってはいないだろうか。

作品の最後に登場する貝がら“Shellphone”は、特別な魔法の道具でも、何でもない。人は想いを繋ぐために、人との交流の中で、確かな愛情を築くことが必要だと思う。命への愛が、Shellphoneなのだ。私はこれからの人生で、多くの親しい人との永遠の別れを経験するだろう。そんな死に直面した時、私は悲しみを乗り越えて、新たな希望の出発点として向き合いたいと思う。そして、心の中にShellphoneを持ち続けられるように、精一杯力強く生きていきたい。

※本文中に登場する絵本について
・『ずーっとずっとだいすきだよ』……ハンス・ウィルヘルム作 評論社 1988年
・『100万回生きたねこ』……佐野洋子作 講談社 1977年
・『わすれられないおくりもの』……スーザン・パーレイ作 評論社 1986年

優秀賞

“僕”を描く ～『自画像、光と影』 ヘレン・シャルフベック～

鈴木 大樹 芝高等学校 2年

ヘレン・シャルフベック。1862年生まれ。フィンランドの女性画家だ。代表作は『快復期』『お針子』など。ヘルシンキのアトリエで学んだのち、18歳でフランスへ発つ。パリで絵を学んだ彼女は、失恋や成功などその時の自身の境遇や心情などをテーマに描いた。そんな中、特に多く描かれたのが自画像だ。代表的な作品は『黒い背景の自画像』（図1）。顎を少し上げ勝気な表情のこの自画像は、シャルフベックがフィンランドを代表する画家10人に唯一の女性として選ばれた際に描いたものだ。彼女の自信が表れているように思われる。

対して、この『自画像、光と影』（図2）はどうだろうか。濁った緑のコントラストだけで描かれている。僕はなぜかこの作品から目が離せなかった。背景と同じ色で描かれた顔は輪郭すら曖昧で、今にも崩れてしまいそうだ。そこには『黒い背景の自画像』のような鮮やかさはなく、むしろ死すら想起させられる。実際この絵が描かれたのは画家の晩年で、このころ同じように暗い色調で朽ちた果实など、死を想起させる作品を描いている。彼女は人生の最後で『光と影』をテーマに何を描こうとしていたのだろうか。

16歳の僕が描く自画像（図3）は自信に満ちている。上から見下すような眼と、顎に当てた手。両者を強調するため顔半分は割った。さらに断面に見える熟した果实で自分の早熟さをアピールしている。もちろん僕の中にあるのは自信だけではない。だけど今の僕にはそれが直視できない。

僕は周りの空気を読むことをしない。幼いころからそれで人を傷つけたし、同時に僕も傷ついた。それらが積み重なってある種の弱さを生み出している。一方

でそんな僕の性格は、他人に振り回されず自分の意思で進むことができるという利点にもなりうる。だから自分の中の何を良しとし、何を切り捨てるべきなのか、よくわからなくなって葛藤することがよくある。だからこそ今の僕は自画像に自らの弱さを描けない。

『黒い背景の自画像』を描いた50代のころ、シャルフベックは友人へ宛てた手紙の中でこう語っている。“自分を見るのは決して楽しいことではありません”（1927.12.12 マリア・ヴィークへ宛てた手紙より）。それは彼女の中でも自らの弱さ、『影』との葛藤があったからではないだろうか。しかし死ぬ際に彼女は多くの自画像を残す。『自画像、光と影』には『影』との葛藤は見られず、どこか達観しているようにすら見える。

『影』が彼女の中からなくなってしまったわけではない。この作品の中には、明確な境界線を持って『光』と『影』がしっかりと存在している。年老いた彼女は、自分の栄光だけでなく、弱さや過去の挫折などあらゆる『光と影』を全て受け入れ、まっすぐに見つめることができたのだ。

今の僕は自分の中の『影』を直視するのが怖い。ましてやそれを作品として表すことなど絶対にできない。この作品にはそんな僕にはない強さがあった。その強さこそが僕を突き刺した。

彼女は友人にこう語る。“私は人、人を見たいのです”（1925.12.06 エイナル・ロイターへ宛てた手紙より）。彼女は絵を描く中で人を見つめ続けた。男、女。老人、子供。裕福な人、貧しい人。貧しい家庭の子供の中に生きる意志を、裁縫をする年老いた母の姿に慈悲を。そうして人々の持つあらゆる面を形にする

中で、最後に自分自身を受け入れる力を得たのかもしれない。

僕は今、人を見ているか。人の本質を作品として表現しようとしているか。この作品が僕に突き付けた問いである。

引用・図版出典

『ヘレン・シャルフベック 魂のまなざし』（求龍堂）

《図1》p113 《図2》p161 手紙 p182～183

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

《図1》『黒い背景の自画像』

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

《図2》『自画像、光と影』



《図3》『自画像（16歳）』

私は高校で美術部に所属している。2年生になり、私は高校美術展に出品する作品のアイデアを考えていた。高校美術展とは県内の生徒が出品する、美術部にとっての最も重要な公募展の一つだ。制作ジャンルは油絵やデザイン、立体、映像など幅広く、私もどのような作品を造ろうか悩んでいた。それと同時に自分の進路についても悩んでいた。私は将来何をすればいいのか。まわりの友人たちは将来に向けて今も必死に努力しているのに、私はそれをただ呆然と眺めているだけ。込み上げてくる焦燥感を消すことができず、今思うと身の回りの日常も全然見えていなかった。

友人は粘土で鳥を作ってみたいと言い、私も立体を作ろうかとぼんやり考えていた。その時、ふと学校のすぐとなりにある公園が目に入った。公園にはさまざまな遊具が並び、その遊具で楽しそうに遊ぶ子供たちの姿があった。それを見て何か心に訴えるものを感じ、私はとっさに立体で公園を表現することに決めた。

制作に取り掛かる前に、まず完成図を書いてみることにした。先生からは「派手で空想的な公園を作たらどうだ？」と助言を頂いたりもしたが、私は一般的な公園で、誰もが一度は見たことがあるような風景を作りたいと思っていた。しかし、なぜその時一般的な公園にこだわりがあるのか、自分でもよく分からなかった。

おおよその完成図ができ、頭の中でもイメージが固まると、次に材料集めに取掛かった。遊具を造る際の素材には針金を使用することとし、できれば様々な色が欲しかった。ホームセンターに行けばすぐに手に入るだろうと思っていたの

だが、店頭には沢山の種類の針金があり頭を抱えた。今回の制作において特に重要なのは針金の硬さである。柔軟性の高いものが必要だったのだが、売り物を曲げる訳にもいかず、試しに買って見たものの上手くいかないことが続いた。結果的に、理想とする材料は割と近くにあり、それは学校の近くにある100円ショップだった。安価に済むこととなったが、一つの作品を作る際に必要な材料を揃えるのも安易ではないと実感した。

そして、やっとの思いで制作に取り掛かり始めたが、これがまた思うように作れない。特に、回転ジャングルジムは球の型をしていて、中が空洞なので作るのにとっても時間がかかった。一方で、公園の遊具が一つ一つ出来上がっていく度に、達成感をかみしめることができた。難しいと思っていた針金の使い方も次第に慣れ、いつしか楽しいという感情が芽生え作業も一気にはかどり始めた。

私は、自分が楽しめることを仕事にできたらどんなに幸せなのだろうと思う。もちろん、楽しいだけで仕事はできないことは分かっている。しかし自分に適した仕事、やりがいを感じる仕事、そして大変な一面があったとしてもいつか楽しいと思える、そんな仕事を見つけることが最も大切なのだと制作を通して感じ、改めて自分の進路と向きあうことができた。

制作中、遊具を見た友人たちと「私、この遊具ですごく遊んでいた！」「あの頃が懐かしいね」など昔話で盛り上がりたりした。その時、私はふと気がついた。完成図を考えていた時、なぜ一般的な公園にこだわっていたのかを。もしかするとこの針金で作られた公園は未来の見え

ない自分自身にとって、唯一の安らぎの居場所だったのではないのか。進路を決めることができず、子どもに戻ることも出来ない。何も考えず遊ぶことのできた過去に逃げ出したい。そんな自分の弱さが滲み出た作品。自分で気付かないうちに私は逃げ道を制作していたのだ。

しかしその一方で、将来やってみたいと思う仕事について考えるきっかけになったのも、紛れもなくこの現実逃避の作品だった。私が抱えていた焦燥感。自分でもその時期、精神状態が不安定になっていたのだと思う。しかし不安定な人間は自分だけではない。この理不尽なストレス社会、現実を耐えきれず会社や学校を辞め家で引きこもりになったり、更には自ら命をたってしまったりする人。そんな人がこの国には年間18万人もいるのだ。私はいつかそんな人達に逃げ道があることを伝え、気持ちを少しでも楽にしてあげられるような仕事がしたいと思った。

私はこの作品を通して、作品を造る大変さや自分自身についての気づきなど、とても貴重な体験することができた。自らの手で切り開いていく人生どんなことが起こるか、それは誰にも分からない。分かっているのは、常に目の前にある課題と向き合い、先を見つめる前にまず自分の足元を見つめ直すことだ。その課題というのは高校生活の最も重要といえる勉強や人間関係などが当てはまる。特別なことでは無いけれど、意識を持って取り組むことが将来のやりたいことに繋がる。進路についても更に興味を深めていくことで、その先の人生が変わるだろう。これからも自らの作品を見つめ直し、偽りのない正直な心で、臆することなく自分自身と向き合いたい。



図1 高永 悠乃《公園》2015年



図2 高永悠乃《公園》2015年

美術を学び始めてから世界の見え方が変わった。美術を学べる高校に入りたと思って画塾に通ったことが私の人生の中での大きな節目みたいなものだったと思う。

中学3年の時。私が画塾に通い始めたことを話すと、周りの子は画塾って何なん？絵を教わる場所？そこで何するん？と言った。確かにそう言われるとわざわざ絵の描き方を人に教えてもらいに行くのって変なのかも…と思った。けど、実際行ってデッサンや色彩・イメージ表現などを教わって沢山のことを学べた。

それは技術や知識が身に付いたというのもあるけど、それ以外にも、私の中の意識が変わるようなたくさんの経験をした。まず、画塾の先生は「ここをこうしたら？」など、私の作品を見て助言をくれる。自分の作品が評価の目にさらされるようになったのだ。そんな経験はあまり無かったから自分が一歩外の世界に出たような気持ちになった。そして、私が特に感じたのは、日常の中にある小さな感動・美しさを見つけられるようになったこと。細かく言えば、誰もが感動するような絶景とか大自然とかだけでなく、ただの「物」にも感動するようになった。

デッサンでは対象物を鉛筆で画用紙にそっくりそのまま描く。大切なのは物をよく観察すること。普段の生活で物を何時間もまじまじと見つめることはあまりないと思う。そんなことをしているのを人に見られたら何あの人、と思われるだろうし知り合いなら大丈夫？と声を掛けられるだろう。デッサンで描くものは手や果物、生活用品、工業製品…など色々ではあるけど日常で見たことがあるものがほとんど。なので、私にとってデッサンの時間は身近な物とじっくり見つめられる時間。普段しないようなことをする時間。

そんな特殊な時間を過ごしてから、私は今まで思いもしなかったことを思うようになった。初めてデッサンを教わった日の帰り道、電信柱を見て円柱だ！先生が言ったとおり明るいところもあって暗いところもあるな、とか家にあるリングを見てリングの形って丸っこくて可愛いな、とか球体ってどこから見ても形が同じで完璧な形だな、とか。自分でも何でこんな変なこと考えてしまうのだろう、と思った。でも、このことを通して最初に述べたような美術を学ぶと世界の見え方が変わるということに気付けた。

このことから、私は美術と日常は深く関係しているのだと考えた。日常の中に美術がある。日常・世界を見つめ続け、美術が生まれた。つまり、日常にもっと目を向ければもっと美術と向き合うことができる。この世界に生きている誰もがアーティストになれる。こう考えているともう「美術」なんて名前をつけて切り離さなくてもいいかも、と思う。

専門的になりすぎないように気を付けよう、と思っている。じっと見つめすぎて、実はちゃんと見られていない。私は美術学校に入ることが出来、今通っている。学校で絵を描くのは当たり前、描かなきゃいけない、という感覚になってきている。美術が学べる環境にいる中で私はまだまだ技術が足りないしもっと知識もつけなきゃ、とよく思う。美術史についての本を読みあさったり美術館に行ったり。そうやって美術ばかりになるのもいいけど、さっき書いたような「美術と日常」のことを思い出すとわたしには社会、世界に目を向けることが必要だと気付く。鑑賞のことでもなら絵そのものを見るだけじゃなくて、絵に描かれたものも実際見てみるべき。例えば美術館で空の絵を見て「きれいだなあ」と思うだけじゃなく、実

際に自分の上にある空も見てみようということ。本物の空はどう？自分の目にはどう映る？

昔の芸術家たちはどんな日常を過ごしていたのだろう。写真やインターネットのない時代、絵を描くときはどうしていたのだろう。犬や猫、波など動くものを描くときは特に大変そう。信じていることができるのは己の眼のみ。それってかっこいい。それに比べて私はどうだろう？ピンが上手に描けない！よし、「ピン 描き方」で検索。普段、絵で困ったときはネットに頼っていた。今思うとそんな自分が情けない。自分の目を信じていることができないのか。もっと自分で悩めばいい。悩んで悩み抜いて、私はピンをこう描く、と強く思える自分の表現を見つけない。現実のものを自分自身の目で見るとたくさんの発見があると思うし美術に関係ないようなことでもきっと繋がることが見つかるはず。

私は美術と日常は深く関係していると思ってから、自分の日常がもっと楽しくなって、この世界って魅力的だなと思えるようになった。絵を学んでから、スーパーの野菜売場の色とりどり、形も様々な商品に目を奪われ、立ち止まるようになる。電車で揺られて、窓の外の風景を眺めるのが好きになるし、隣の人もそうしていると、何だか嬉しくなる。美術は自分と無関係だと思っていて人に、少しでもそんなことない、美術は身近なものだと感じて欲しい。

そのために私はやっぱり日常と向き合うことを大切にしたい。これから将来どうしたいか。どんどん美術の世界へ入り込んでいっている今、もっと世界を見つめて、社会と向き合って、自分であがいていきたい。



図1 《またぎ》福田百花

私の母はカメラマンだ。それゆえに周りにはいつもアート関連の職業を持つ人しかいなかった。小さい頃は、お母さんはみんなカメラマンだと思っていた時期もあった。

そんな環境で育った私はアートの道へ進むことしか考えず、いつしか芸術学校へ通う決心をした。何かをデザインすることへの興味が湧き、デザイナーになろうと考えたのである。

芸術学校のデザイン科で学んでいる私は、アクリル絵具を使って制作することが多い。しかし今回は違った。真実が刻み込まれた写真に強くひかれたからである。写真でなければこの作品は伝わらない、強くそう思った。そのときに私が出した作品がこれだ(図1)。

題名は《またぎ》。名前の通りまたぎという職業を撮影したものだ(図2)。なぜ《またぎ》というテーマを撮影することに至ったかという、母に「またぎの撮影が入った。スーパーで売られている肉がもともとその形をしているのではなくて、誰かの手によって殺されて



図2 (図1の中の1つ)

いる現場を見ることは食育の観点からも芸術としての視点を広げる意味でも大切な経験になるはずだから一緒に同行してその目で見なさい。」と言われたからだ。最初は正直興味本意でしかなかった。

不思議である。私はグロテスクなものはとても苦手で、ドラマでよくある病院の手術シーンも、見ていて気持ちが悪くなってしまうくらい嫌いなのだ。しかし、カメラのファインダーを覗いていると、このように鹿を解体しているというのにもかかわらず平気でシャッターを切っている自分がいた(図3)。きっとファインダー越しで見ることによって異次元でも見ている感覚になるのであろう。

鹿が畏にかかった状態のときから見ていたので、生きて動いていたときから、鉄砲で撃たれ、瀕死の状態のまま解体され、死んで固まっていくまでの一連を写真に取めた。さっきまで濡れた瞳が黒々と光っていたのに、ある時を境に瞬で乾いた緑色に変化した。それは鹿の魂が消えた瞬間を意味していた。目が緑色になった鹿からは生気が感じられず、もはや肉の塊にしか見えなかった(図4)。

私は撮り続けた。しかし凄惨な光景ゆえいろいろな考えが脳裏をよぎった。こんなものを展示したら先生や友達は何んて言うだろうか。

心の葛藤を母にぶつけた。母はこう言った。

「せっかく撮ったこの写真を世に出さなければ鹿は無駄死にしたことと同じ。こういう現実があることを皆に伝えることに意味があると私は思う。」と。確かに、私が学校に展示することがなければ誰もこの鹿が死んだことを永遠に知ることは無いだろう。昔の人は、生き物を殺して食べて生きていたのだ。自然界のライオンや鷲などの肉食動物もそうである。それを今や人々は皆スーパーでお金を払って買えば食べ物が食べられるのである。そんなのんびりと楽な生き方をしている我々にとってはこの写真を目の前に出されたら、「かわいそう!」「こんなこと



図3 (図1の中の1つ)

をしていいのか!」など批判の声が多く挙がるだろう。しかし、考えてみれば、スーパーの向こう側では肉を売るために動物を殺して肉に加工している人達がいる。もし、その狩猟してくれる人がいなかったら、自分達で狩りをしに行つて自分達でさばいて・・・という一連の工程を全てやることになる。

このようなことが日々の暮らしの裏側で現実には起きているのだ、というのをもっと多くの人に知ってもらいたい、伝えたい、という気持ちになり私は写真を世に出すことにした。

プリントした写真を学校に持って行ったら、先生達はやはり躊躇した。そして、私に「展示は中止にできないか」と言ってきた。

しかし、そんな軽い気持ちで展示を決めたわけではなかったので先生達にわかってもらいたく、職員室のドアを叩いた。長時間に及ぶ説得の末、私の熱い思いを理解してくれた先生は、この作品への思いや伝えたいことの書いた説明をいれてくれれば展示しても良いと言ってくれた。

私は先ほど書いたような思いやメッセージを書いて共に出展した。

この展示を終えて、命を粗末にすることは一番良くないと誰もが思っていることであり、当たり前である。しかし、今回「命」ということをアートの題材にすることによって、たくさんの方の目に触れ、いろんな人から様々な意見をもらい、あの鹿の死は無駄にはならなかったという手応えを感じた。

動物がこのように命を落として皆の食卓に出てきているのだ、という教えにもなったし、さらに命の大切さを学ぶ機会になったのではないかと思う。私には今ならわかる。母が伝えたかったことはこのことだったのかも知れない。



図4 (図1の中の1つ)

金属とはなにか？硬いもの、冷たいもの、鋭いもの…。どれでもない。

金属とは、小さな無限を内包した人類の偉大な発見である。ある時、部活の顧問からこんなことを言われた。「本当に好きだね、金属」

今から約一年前、高校2年生だった私は、1年に一度の作品展覧会・高校展の作品の案を、締切日まで出せないでいた。1年生の時から大好きな金工をしているが、その時点での経験年数はたったの1年。いや、1年も経っていなかったと思う。しかも、1年生の時の高校展での初出品作品は、話したくないほどに散々なものだった。そんな経験しかしていない私に、「金属工芸の作品」と言えるような作品など考えつかなかった。どうすればいい？何を作ればいい？わからない、わからない、わからない…。

部室に行って、悩むことしかしていなかった私に、その顧問は「体、動かしても行ったら？」と、おおよそアドバイスではない言葉をぶつけた。ただ、アドバイスをもらえる状況でもなかったこともまた事実。おとなしく校庭に出た。」

校庭に出ても、爽やかな風も輝く太陽も何もなく、ただセミが鳴き、うるさいだけだった。ん…セミ…蝉？…虫？…そうだった。その時、頭の中はたった一つ。「閃き」で埋め尽くされていた。早足で部室に戻り、顧問に告げた。

「先生、虫作ります」顧問は無言でうなずき、スマホを取り出して何か調べはじめた。1分も経たないうちに「これでしょ？」と画面をこちらに向けた。そこには「自在置物」のページと、1匹のセミの写真があった。いや、セミの形をした作品の写真があった。聞けば自在置物とは、虫や魚などを、金属

板を打ち出し、そっくりそのまま形作る工芸分野とのことだった。

すごい。こんな世界があるのか。

「製作日数はまだあるから。がんばってね。」よし、がんばろう。

翌日から私は製作に取りかかった。といってもこの場合、まずは虫を獲りに行ったというほうが正しい。何しろ虫の姿を写すだけでなく、自在の名の通り、関節も動くというのだから、本物を捕まえないと始まらなかった。校庭に出ようと下足室に行くと、何の因果かロッカーの下に蜂の死体が落ちていた。…蜂か。うん、蜂にしよう。幸いなことに、死体はまだ綺麗なままだった。

ようやく製作開始。方法としてはモデルのサイズを細かく計り、それをもとに金属の板を切り出し立体に起こしていくのだが、どうも蜂は小さすぎるようで作品になりそうになかった。どうしようか…よし、でかくしよう。そう決めるのに時間はかからなかった。まず腹を作り、次に胸、そして頭、最後に脚。しかしそう順調にはすすまない。作っているときはまさに金属との格闘。どこを叩いても厚い金属板は思う形になってくれない。どうすれば蜂は生まれさせてくれるのか。

結局、学校では答えは出ず、家へ持ち帰ることになった。あらためて家で自在置物を調べてみると、なるほど。自在置物の作家がいるようだ。そしてその作家の作品の中に、ロッカー下のアイツもいた。よし、この作家の蜂を参考にしよう。決めたら早い私はそのハチを見ながら腹の構造、翅の開閉、眼の表現と、止まることなくペンを走らせた。設計案を書き尽くしたとき、父が帰ってきた。私は意気高々に父に話した。蜂を作ることを。世には自在置

物というものがあることを。書き終えたばかりの設計案を父に見せると、父は顔をしかめた。「蜂をつくるんだよな？お前が書いたのは蜂じゃなくて自在置物の設計図だろ」

あれ？蜂を作るってさっき言ったよな？私は戸惑いながら、もう一度話した。自在置物のことを。そして自在置物の作家のことを。すると父は呆れた顔で笑い「いいか、その作家に憧れることはいい。けどな、その作家になろうとするなよ。お前は自分で言った。蜂を作るって。その作家の作品を作るんじゃないぞ。」

ああ。覚める、とはこのことか。

私は部屋に戻って紙を丸めて捨てた。そうだ。私は蜂を作るんだった。作ろう。それからは試行錯誤の毎日。叩き方。道具。素材。関節の構造。展示方。蜂を形作るすべてに、私を出す。だれかが言っていた「人間、一度した失敗は二度しない」

あれは嘘だ。四回も中指を落としかけたじゃないか。しかし、何度も何度も失敗するうちに、金属というものがわかってきた。気がつけば、製作中の失敗は無くなっていった。

ついに、生まれた。

自分で言うことではないが、生まれた蜂は、金属ではなく、まさに蜂だった。展示台の上で、木箱に入っていたものの、それは私が下足室で出会ったアイツそっくりだった。

アイツの審査結果は中々のものだった。奨励賞。たったの3文字だが、その3文字が、私の1ヶ月の闘いを讃えてくれた。「おめでとう」

私は考える。金属とは何か？それは挑むもの、闘うもの。そして金属とは、私自身。

昨年の秋、東京都六本木の美術館で催された展覧会、「Art as a Haven of Happiness」へ足を運んだ。この展覧会は、障害のある方たちの色々な作品を自由に展示しており、会場には今まで美術館で感じたことのないポップで陽気な雰囲気広がっていた。

作品は作者によって、どれもまるで違っていた。

色とりどりな糸を信じられないくらい細かく刺繍した服、ダンボールに絵の具を厚く塗り重ねた手の平サイズの絵、他にも細部にこだわりのあるドールハウスや、ノミ跡が粗く残った木の皿・・・どの作品にも作り手のあふれるエネルギーをひしひしと感じた。

会場内は本当ににぎやかで、熱気に包まれていた。それは作品だけが放っていたのではなく、会場にいた「人」からも放たれていた。会場には、もちろん作品を見に来た一般の方もたくさんいたが、同じように障害のある人や、その家族も大勢いたのだ。彼らは会場を走り回り、作品に触れ、鑑賞している人に話かけていた。他の美術展では、このような行動は他のお客さんの迷惑となり注意させられてしまう。

しかし、この美術展では違った。彼らがいることで、会場内には交流の場が広がっていた。話しかけられた人は、最初は戸惑いの笑みを浮かべながらも、彼らの言葉や動きに真剣に耳を傾け、言葉を返していた。実際に、私も作品を見ている時に肩を叩かれ、振り向いたら三十歳

くらいの男性が立っていた。すぐそばに、彼のお母さんらしき優しそうな女性もいた。その女性は私に、「いきなり、ごめんなさいね。」と言った。そして、その男性に「ほら。」と言い、男性は私に話しかけてくれた。胸の前で組んだ両手を動かしながら、ニコニコと。何を言っていたのかは分からなかったが、一所懸命に話していたから、一所懸命分かってと頑張った。彼が話し終えた後、女性がこう言った。

「今、あなたが見ていた絵、この子が描いたんです。あなたがとても真剣に絵を見ていたから、嬉しくなっちゃって。急に、ごめんなさいね。」

私はそれを聞いて、心が熱くなるのが分かった。私も、私も！！すごく嬉しいです、この絵とてもいい、素敵です、すごく。彼に身振り手振りで伝えた。彼は嬉しそうだった。

私が経験したように、あの美術展では私達と、障害を持つ彼らとの、彼らの作品との心のやりとりがいくつも生まれたと思う。

走り回り、作品に触れ、いきなり話しかけてくる彼らが、主役だった。しまいには、スタッフの人達も、走ることでぶつかったら危険だからと“作品にお手を触れないで下さい”の看板を片づけたほどだ。もう一つ、作品を壊すような触り方をする人はいなかったからだと思う。

主役の彼らが、会場を盛り上げ、私達は圧倒され、感じさせられ、心が幸せや、楽しさ、喜びで満たされた。

会場を出て、家へ帰るまで、あれだけ幸せ一杯の気持ちで帰る美術展の帰りは、今までになかった。

今、私はふるさとである東京を離れ、雄大な北の大地でものづくりに励んでいる。楽しいもの、面白いもの、人が驚くもの、感動するものって何だろう？と、考えたりしている。でも、きっと、そうではない。

大切なことは、ありのままの、飾らない心で目の前の人と話すこと、聞くこと。世界に目を向けること。

すっぴんの心で過ごす中で、私が感じた思いを一生懸命形にすること。それが一番、いい。大切だ。そこに私だけのものづくりが、ある。

彼らから、彼らの作品から学んだこと。彼らと、彼らの作品とつながり、知ったこと。これからも私は自分のところ、人のところを見つめていきたい。

優秀賞

粘土のクツを創る

山中 真名 岐阜県立岐阜高等学校 1年

中学生の時、美術の授業でバスケのシューズを粘土で造ったことがある。実際の靴を横に見ながら、丸みを帯びたつま先から垂直に立ちあがるかかとまで立体的に造形した。靴ひもやその穴などの細部まで注意した。

乾燥して硬くなった完成品のクツを家に持ち帰ると、親は笑いながら「面白い」と言って、玄関の下駄箱の上に飾ってくれた。

その時は造ることに夢中で何も考えなかったが、今思い返すと、いろいろと疑問がわいてくる。そんな疑問を二つぐらいに分けて書いてみる。

粘土で造ったクツは一体何だろう。本物の靴は、履物という役割をもっている。履物は、例えば地面の尖った石ころやガラスから足を守ってくれる。役に立っている。でも、粘土のクツはもちろん履くことはできないし、一体何の役に立つのだろうか。何かの重しとして役に立つかもしれないが、そのために造ったわけではない。

人間の造るモノは様々あるけれど、「役に立つ」ことが分かり易いものと分かりにくいものがある。例えば、バスケのボールはバスケットをするために役に立つ道具として分かり易い。でも、同じボールでも球体の彫刻は何の役に立つのだろうか。「面白い」のだろうか。あるいは「美しい」のだろうか。

それは人間の感覚に訴えかけて心を感動させるのに役に立っているのかもしれない。しかし、運動具はスポーツをする誰にとっても役に立つが、球体彫刻はそれを見る誰にとっても役に立つとは言えないのではないか。

最近興味を引いたニュースのひとつに、新しい国立競技場の話題がある。競技場もまたスポーツをするために役に立つ巨大な道具だろう。その道具が、周囲の環

境を壊し、あまりにお金がかかるので結局造ることを取りやめたのだが、その案を選んだ人たちはきっと「面白い」とか「美しい」とかいう理由で評価したと思う。人間の造る様々なモノには、運動具のように役に立つ手段的な側面と球体彫刻のような造形的な側面があるとすると、競技場というモノは、その二つの側面や価値をあわせ持つ必要があることになる。

歴史の教科書は、様々な時代と地域で人間が球体彫刻のような造形的なモノづくりをいつも大切にしてきたことを教える。しかし、私にとってバスケのボールの価値は理解しやすいが、造形的な球体彫刻のそれは、理解するのがずっと難しい。

疑問に感じた二つ目は、粘土で作品を造っている時の私の気持ちである。

造る作業では、靴に似せることを意識してこまかな特徴を捉えて形にしていた。そこには、粘土のクツを完成させるという目的がはっきりとしていた。それは、他の授業において教科の理解を目的として「勉強」するのとよく似ている。完成や理解という目的に向かって、意識しながら進めていくという作業としては同じである。

ところが、そのような目的に向かう作業とは異なり、クツのつま先の優しい丸みを粘土で造っていると、その作業自体が楽しいという気持ちがおきるのである。完成という目的を忘れてしまい、ちよつと大袈裟に言えば、粘土と遊んでいるような気持ちと言えよのだろうか。

身近で幼児が嬉々として夢中でお絵かきをするのを見ることがある。幼児は完成させるという目的や自分の気持ちを意



識して親に伝えるという目的があるようには見えない。ただ描くこと自体が楽しいと考えるほかない。

造るという作業は不思議だ。「勉強」していても楽しい気持ちにならないわけではないが、それとは違う楽しい気分が作業の途中で顔をのぞかせる。

私たちの日頃の学校生活の中心は「勉強」が占める。教科の理解という目的に向かって、良い成績という目的に向かって、良い大学に入るという目的に向かって、さらには幸福な生活という目的に向かって、その手段のような「勉強」をしている。それが今大切なことだとは思う。

しかし、そのような学校生活の中で、靴ばかりか鉛筆もノートも教科書も黒板もさらには学校も、私たちの周りの殆どのモノが目的に向かって役に立つ道具や手段として、私の身の周りに置かれていることに改めて気づく。

誰もが薄々感じていることは、そのような学校生活の「勉強」の中で落っこちてしまう何かがあることだ。

落っこちてしまう何かはいろいろとあるかもしれないけれど、少なくとも造形する作業や造形物と接する時の幸福感や楽しさは、そのような落っこちてしまい易い何かを支えてくれていると私は思う。

私は私自分が分からなくなるときがある。いったい自分は何のために生まれてきたのか。時々、腐っているようにも思える世界に何か残せるのか。そんなどうしようもない思いや言葉をぶつけることができるもの、それがわたしにとっての美術であった。私は、左耳が難聴である。鼓膜も全て綺麗に揃っているが、耳小骨という骨が振動しないため鼓膜まで音がとどかない。だが、席は前のほうの固定の席にいれば授業は聞けたし、それほど生活に支障は無かった。たまに話が聞き取れなくて、ついていけず、次に何と発言すればいいのだろうと会話のキャッチボールができずに苦しむこともあったけれど、そんなときは家に帰って絵を描いた。自分の中の思いや楽しい世界の絵、紙芝居、絵本、沢山沢山絵を描いた。小学校入学前に五十枚くらいだった絵は日を重ねるごとに更に増えていった。出来上がった絵を父の務め先の学校の図書の先生にプレゼントしにいったり、家族や親戚、沢山の人に絵を描いた。笑えるくらい下手で笑えるくらい素直な幼少期であった。ああ、ユーモア大事！

わたしは、中学生になった。その頃、私の身の回りでは、様々なことがたてつづけに起こり始めた。父が天国へ行き、家庭が大変なことになり、部活もうまくいかなかった。いつしかクレヨンも鉛筆も持たなくなっていた。また、右耳も聞こえにくくなるかもしれないと医者に言われたのをきっかけに国立病院に連れて行かれた。気分はまさしくブラックコーヒーの中に溺れているようである。

そんなときも救ってくれたのは美術であった。病院は広く、白く、またあまりにも殺風景でそこに唯一色があるのは絵画だった。わたしは、「世界平和」という100号くらいの大きな絵に強くひかれた。しばらく絵は描いていなかったが

その絵はいつまでも眺めていられる気がした。絵は静物で茶色いテーブルの上に地球儀、木製のもの様々な物が青いリボンでかこんであり、その色の鮮やかさとリアルな描写に心奪われ、暇で長い病院の時間でさえ、短く感じた。私にとってこれ程よい伝達手段はなかった。喋らなくても伝わる、キャンパスに心を傾ければ伝わってくる。美術とは本当に美しいと思った。

右耳の鼓膜が倒れてしまったとき、本当に恐怖だった。テレビの音を最大にしても所々聞きとれず、何と言っているのかわからない。音量を最大にしたまま私は泣いていた。いつ聞こえなくなるかわからない。いつ喋れなくなるかわからない。

幸運なことにすぐに病院に行くことができ、鼓膜をもとの位置に立て直してもらえた。音は戻ってきた。そのとき私は思った。世の中には色々な人がいる。体の不自由な人、両耳聞こえない人。でも、感情は誰しも持っている。きっと伝えたいことがあるはずだ。伝えたいことや伝えるべきことを伝えられる世の中がいい。

そこで私は美術科のある高校を選ぶことにした。隣には聾学校がある。登下校の時に聾学校の高校生とすれ違う。「朝はどうやって起きるのだろう」「ドラマや音楽の話はするのだろうか」「日常で困ったときはどのように乗り越えているのだろうか」沢山の疑問が浮かぶ度に胸に込みあがるものがある。私は片方の聞こえが悪いだけで両耳聞こえない音の無い中で生活する人の気持ちがどんなに分かりたくてもきっと全部は理解できないのかもしれないが、何か力になれるはずだ。一緒に世界を広げられるはずだ。わたしは今色々なことを試している。キャンパスに色をちりばめたり、厚くぬった

り、薄く塗ったり、こすったりぼこぼこにしたり。でも、時々筆が止まる。知識が足りないのだ。感情だけで突き進んでいけるほど美術は甘くなかった。世の中の様々なことを知らなければならない。

環境問題、政治、生物、語学、様々なことを学び感じてこそ相手に伝えられる作品ができるのだと痛感している。私は今、言語聴覚士や聾学校について調べたりしている。全国には約六千人、聾学校の生徒がいるらしい。聾学校の子供たちの絵でカレンダー製作に取り組んでいる地域もあり、とても胸に響いた。彼女たちの言葉にできない世界を絵で表現してあった。もっともっと沢山の色を教えてあげたい。一緒に気持ちを伝えあいたい。

きっと、“伝えようとする”そのものが芸術なのである。一人でも多くにその思いが伝わればもっといい。わたしは今自分の表現方法を模索中である。キャンパスを破ってしまいたくなる時もある。トイレのTOTOの音姫を流して泣くときもある。きっと今がもがきどころ伸びどころなのだ。

今、運動部と美術部に所属している。多くの世界を知ることができている。片耳の聞こえが悪いのも、大切な人を失った経験も、きっと私が世の中の沢山の人の思いを感じることができるよう、神様がそうしたのである。

自分が何のために生まれてきたのか分かった気がした。私は絵を描くためにそして、音の無い世界でも色を与えられるように。

第6回高校生アールライター大賞優秀作品集

編集 直江 俊雄 箕輪 佳奈恵

発行 筑波大学芸術専門学群 2016年3月5日